

正・政・清・聖・性・醒

炉ばたセイ談



令和6年秋号

巻頭言

今年も梅雨の時期がやって来た。もうすぐ明けるだろう。明けると夏だ。太陽が一杯の夏だ。

九十を過ぎてもう二、三年になるが、季節が巡ると、ああ・・・日本は本当にいい国だと思う。昔観た“太陽がいっぱい”という映画を思い出すが、まだアラン・ドロンが若く、あの幕切れの淡い陽光のシーンがなつかしい。

思えば、映画を最近全く観ていないことに気付いた。つまり映画館でだ。映画はちゃんとした映画館で観てこそ思い出が濃くなるのだ。

もう映画館は遙か彼方思い出の中、少年時代である。むかしむかしが懐かしい。結局、トシをとったと云うことだ。つまり人は、年がら年中トシを気にしないでいい。トシを気にするようになるのには相当の年月を必要とする。大体なつかしいなどという感情は、そもそもそんなに出てくるものではない。今年もいい年であったように、来年もいい年でありますように。

目次

入来の文化振興を考える	・ ・ ・ ・ ・ 中西 喜彦	1
歴史的町並み保存地区の今を思う	・ ・ ・ ・ ・ 祁答院隼人	4
老農塚田喜太郎翁「その遺徳遥かなり安積開拓事業の礎となる」	・ ・ ・ ・ ・ 宮下 亮善	7
「独立独歩」	・ ・ ・ ・ ・ 十五代沈壽官	11
不思議な力	・ ・ ・ ・ ・ 奥村 太	14
入来院のこと	・ ・ ・ ・ ・ 溝口 敬人	20
溝口弁護士を偲んで	・ ・ ・ ・ ・ 入来院久子	24
南国ギャンブラー	・ ・ ・ ・ ・ 串田 達治	26
『発掘少年の恋? 高原のお嬢さん』	・ ・ 白男川孝仁	40
「おもてなしの心」は日々のディテールに宿る	・ ・ ・ ・ ・ 奈良迫英光	49
時間は平等なのか?	・ ・ ・ ・ ・ 米森寿美男	57
入来行事考 十五夜（陰暦八月十五日）	・ ・ ・ ・ ・ 中山とし子	62
新納忠元～郷中教育の原点 ― 歴史を訪ねる旅（18）	・ ・ ・ ・ ・ 下土橋 渡	69
能は私の道標	・ ・ ・ ・ ・ 中西 喜彦	77
〔第20号発行記念掲載〕		
渋谷氏五族の消長	・ ・ ・ ・ ・ 入来院貞子	89
「炉ばたセイ談」の生い立ち	・ ・ ・ ・ ・	107
編集後記	・ ・ ・ ・ ・ 入来院・下土橋	108

入来の文化振興を考える

中西 喜彦



私が昭和39年7月大学牧場建設予定地（入来町浦之名大谷）に入山して、早くも60年が経ちました。牧場は昭和43年に開場しましたが、その年は丁度明治百年と言われておりました。入来町も庁舎が新設されたり、記念の要覧ができたりしていました。その要覧の中に入来町の文化財として清色城跡、茅葺門、入来文書が紹介されていました。しかし、在職中は全く入来の文化財のことは知りませんでした。

入来院ご夫妻は平成6年に東京から定年を機に帰郷し前述の文化財を中心に文化事業を振興してこられました。

研究者間では有名であった入来文書の解説などを行い、その普及に努められました。また、武家社会の紹介の一端として清色城跡で薪能を開催されました。

そのうち平成14年に第4回の薪能として貞子さんは地元を題材にした「鳥追舟」を現在の薩摩川内市総合運動公園（サンアリーナさんだい）で開催し、記念にJR川内駅前とその母子像が建てられました。

平成22年に第7回入来薪能があるということで鹿児島謡曲連合会の会報に入来薪能に関する記事をお願いするために入来町浦之名麓にある入来院家の茅葺門を始めてくぐりました。

それ以来入来院ご夫妻の文化財を活用した文化振興事業を知ることが出来ました。

貞子さんは筆者がお会いした翌年にはお亡くなりになったので入来院重朝さんと相談

し「貞子さんに誌上で再会」を旗印に本誌にそれまでの振興事業の内容を取り上げてきました。薪能の開催の様子やその苦勞が関係者の投稿で明らかになっています。早いもので昨年、貞子さんの13回忌を終えました。

2年前から長女の久子さんによって「入来花水木会」を再興し、研究者の講演や新著の紹介などが行われています。筆者が入来と縁が出来て振り返ってみると入来を取り巻く社会情勢の変化は著しいものがあります。大学牧場の横には鹿大理学部为天体望遠鏡と、氣象庁の電波望遠鏡が設置されています。また、牧場設置時にあった町営肉用牛繁殖育成センターは城山ゴルフ場に変わっています。また、大学から牧場まで45キロあった距離が道路拡張や新設により、25キロまでに短縮されています。

入来町は、市町村広域合併により薩摩川内

市になりました。入来文書に裏打ちされた入来院家の歴史は、日本の封建社会の成立から終焉までの歴史で、世界的にも希有なものだと思います。そこで、目的を大きくして世界文化遺産登録を想定して活用したらいかがでしょうか。

最近、沖縄県の八重山列島のことをヘブライ語で尊い山という意味だと聞きました。入来にある八重山の由来も同じような意味ではないかと思えます。入来の八重山は、川内川や甲突川の源流となっています。入来の八重山の意味は、水に恵まれた山という意味ではないかと思えます。

現在、第2次大戦後の米国の一国支配が終わり、いわゆるグローバル化から多極化の時代に移りつつあります。このような時期に、入来麓において長期政権が続いた理由を新しい手法や新しい視野で追及することは、意味



薩摩川内ゆかりの宝生流・能『鳥追』（シテ：石黒実都、子方：吉満剣心）。令和5年10月22日、於：かごしま県民交流センター。「訴訟のために都に行き、十数年振りに帰国した日暮の主人は、わが妻子に鳥追いを見せていた左近尉を討とうとする。すると妻がそれを止め、ことの発端は夫が十数年も留守にしたことにあると諫め、能の鳥追舟はハッピーエンドで終わる。道理を弁えた妻の、愛情深く、気丈な振る舞いが印象的。室町時代から継承されてきた能である。」

があることと思います。

今年、佐渡の金山が世界遺産に登録されました。入来院家の今までの30年に渡る文化活動を一層意義あるものにするにはもう一つ大きな目標が必要だと思っています。世界遺産登録を目標にしたらどうでしょうか。八重山を中心とした日本封建社会の持続の理由を明らかにしてほしいと思います。今や八重山の住民となった鹿大や城山観光ホテルや、薩摩川内市を巻き込んで大きな組織を作り上げ新しい展開を考えてほしいものです。

（鹿児島謡曲連合会前会長、鹿児島大学名誉教授、炬ばたセイ談会会長）



歴史的町並み保存地区の

今を思う

祁答院隼人



幕府の役人などが使用した宿舎や脇本陣（本陣の予備）が設けられ、会津藩をはじめ新発田藩、村上藩、庄内藩、米沢藩などの参勤交代や江戸廻米の運搬路として重要な役割を果たした。

一、「大内宿」江戸時代そのままの景観が残った理由

福島県南会津地方の山あいにある大内宿（福島県下郷町）は、二代將軍徳川秀忠の四男で三代將軍家光の異母弟である保科正之によって築かれた宿場町である。

寛永二十年（一六四三年）に陸奥国会津藩二十三万石の本身の大名に引き立てられ正之は、会津城下と下野の国（現在の日光市今市）を結ぶ三十二里（約130km）に及ぶ会津西街道を整備した。

若松城（鶴ヶ城）から五里（約20km）の距離にある大内宿には、本陣（大名や旗本、

しかし幕府は一六八〇年に五街道（東海道、日光街道、奥州街道、中山道、甲州街道）以外の街道（脇往還）の通行に対する取り締まりを行い、大内宿を通る会津藩の参勤交代はなくなってしまった。

その後の大内宿は、しばらくは宿駅・農村としての「半農半宿」の時代が続いたが、一八八四年に日光街道が開通し、明治になり道路や鉄道が整備されると、山の中をぬう街道は使われなくなってしまった。このため大内宿は完全に宿駅としての役割を終えてしまった。そして明治期の近代化にも取り残されたため、大内宿の住民の暮らし向きは、江戸時



現代の大内宿（福島県南会津郡下郷町）

代後期から出稼ぎを主体とした貧農が続いた。しかしその一方で大内宿では、主要な交通網から取り残され近代化から見放されたことで、正之公により施された重厚な茅葺き屋根の建物や街並みが、第二次世界大戦後の開発からも免れた。このため、江戸時代の宿場町にタイムスリップしたような景観が残ることになったのである。

二、多くの観光客を引き付けているのはなぜ

ポストコロナの現在、大内宿はインバウンド観光客を含めて多くの観光客を引き付けている。300mほどの旧街道沿いには五十棟近くの伝統建築が並び、中には築四百年の建物もある。中心部には茅葺き屋根の「大内宿町並み展示館」があり、大内宿の歴史や江戸時代の宿場の様子を知ることができる。

そしてその一帯は国から「重要伝統的建造

物群保存地区（以下伝建地区）に指定されている。この伝建地区の指定を受けるにあたり、住民は自ら「売らない」「貸さない」「壊さない」という住民憲章を創りそれは今でも守り続けられている。

ただ観光地となった大内宿の宿屋だった建物の多くは、郷土料理店やお土産店になっている。特産品として箸の代わりに一本のネギを使って食べる「ねぎそば」が有名なほか、会津塗として知られる漆の塗り物が人気だ。

三・重要伝統的建造物群保存地区はこのままでいいのか

一九七四（昭和四十九）年に全国町並み保存連盟が結成され、翌年七月に文化財保護法が改正されると、国や自治体の働きかけによる歴史的町並み保存運動が展開されていく。なかでも文化庁選定の伝建地区は、二〇二三（令和五）年十二月現在で105市町村

127地区に達し、初年度に選定された伝建地区は二〇二四年に四十八年を迎えた。

このように失われつつあった景観は、保存あるいは修景されるようになりつつある。しかしながら伝建地区選定後の問題点を顧みることはなく、また選定時には建造物調査から住民意識調査まで詳細な報告書がまとめられたものの、その後の追跡調査が実施された伝建地区は少ない。四十年以上前に創られた住民憲章は、果たして今の時代にも有効なのだろうか。

選定後の各地区の現状を調査し、その問題点を明らかにすることは、今後の保存事業の継続性を検討し、新たな文化的景観や伝建地区を選定する際に活かすことができるはずである。

（作家）

老農塚田喜太郎翁

「その遺徳遥かなり」

安積開拓事業の礎となる」

宮下 亮善



「和尚さん、郡山の安積^{あさか}に行かれるのであれば、是非、ヤドン先祖の墓に花を供えてきて下さい」、「ウーン団体旅行だから、途中から予定を変更するのは難しいですね」と、さして気にもせず^{あさか}に会話を終わったのですが、二週間ぐらい後にまた先日^{あさか}の話。「ウーンその人はどんな人で何をされた人ですか」と尋ねると、現鹿児島市谷山山田の塚田喜太郎と言う人で、藩政時代から薩摩では農業指導者として功績をあげられ藩庁から表彰を受けられたほどの人物であると。そんな人物の墓が何

故福島^{あさか}の郡山安積の地にあるのかと、いよいよ興味が沸き事情を聞きおよんでいるうちに、これは是非とも墓前に額ずかなければならないという思いを深くし予定変更する次第になりました。

郡山（福島県郡山市）が大きく変貌するのは明治五年（1872）、熊本藩士安場保和が福島県令として赴任してからである。安場は貧困に苦しむ郡山地域を蘇らすため、猪苗代湖の水を引く「安積疎水開削事業」を企画し、担当課長職に旧米沢藩士中條政恒を任命した。この郡山（安積地域）は「水は西に流れても東に流れない」といわれる不毛の土地、猪苗代湖の水を安積原野へ疎水するという構想は江戸時代から存在していた。

福島県の開拓に呼応した地元豪商たちは明治六年「開成社」を結成し、本格的な開拓に乗り出した。このようなおり、明治九年

(1876)、明治天皇の東北巡幸の下見に來た内務卿大久保利通は福島県と開成社が進めて來た官民一体の開拓事業の立ち上げに感動して「明治近代化国家建設の礎はこの地にあり」として、明治十一年(1878)三月に事業案として提出し政府は予算を計上したが事業開始目前に、紀尾井坂で島田一郎らの凶刃に倒れた。

しかしながら「大久保の夢」は明治政府初の国営農業水利事業「安積開拓・安積疎水開削事業」として、明治十二年(1879)猪苗代湖「十六橋水門」の建設を緒に明治十五年(1882)延べ八十五万人の労力と当時の年間国家土木予算の三分の一を要して、水路五十二km、分水路七十八kmが安積疎水として完成した。約四千haだった米の作付け面積は最大時一万ha以上広がった。収穫量は約四千五百tから十倍以上へと大幅に増え実り

多き大地へと生まれ変わった。

この安積開拓事業は「殖産興業」と「土族授産」の救済を目的としており、明治十一年九藩(久留米、会津、土佐、鳥取、棚倉、岡山、松山、米沢、二本松)の五百戸数、二千人が入植した。しかしながら、開拓地では当初の意気は消沈し失望して離農しようとする者、帰郷しようとする者などが続出し、安積開拓事業は一大危機に陥ってしまった。

内務省勸農局御用掛授産地業務主管として赴任していた奈良原繁はこの実情を憂慮して、政府の松方内務卿に強く上申し、明治十三年五月開拓地営農指導者として老農二人を招請した。鹿兒島から塚田喜太郎が招かれ農耕を指導することとなった。奈良原繁の「お国のため」との懇願にこたえて甥の森元山助を伴い徒歩にて二ヶ月を要して四百数十里の東北安積を目指して現地に赴いた。



老農塚田喜太郎翁墓
郡山市喜久田町、真言宗医王山龍角寺



大久保神社
郡山市安積牛庭、品川萬里郡山市長（左端）、大久保利通公玄孫洋子氏（右端）

時に六十歳 “生きて再び故郷の桜島山を見ることはあるまい” 悲壮な覚悟をもって鹿児島をあとにした。

荒土に苦心惨憺するも鹿児島でのさつま芋肥料に骨粉を施すのをヒントに骨粉施肥・肥土に混ぜた粃を播き芽が出た頃田圃に水を引くという「塚田式直播法」を確立させた。

三年目に従来の十倍の収穫をした。土族農民たちは一気に活気づき、当時牛馬が死ぬと野山に捨てていたものを遠くまで泊まりがけで骨集めに奔走する。もの凄い悪臭にあちこちの村々から出る苦情も物ともせず曰でひいて骨粉づくりに努力した。気位の高い土族農民たちが本物の農民になったといわれた。

苦節十年 “自分の墓は西の方の鹿児島に向けてくれ” が遺言であったという。

明治二十三年二月二十一日。享年七十歳。
医王山龍角寺墓域に永眠。

法名 喜悅院釈善種義讚清居士
鹿児島県薩摩国谷山郡谷山村大字山田

頭官大久保利通公と一介の農民塚田喜太郎翁が共に明治近代国家建設一大事業に貢献し、今日の郡山市発展の基礎を築いた。

「喜太郎ドンは温厚篤実で怒ったことのない仏のような人だった」と。

郡山は “鹿児島に恩はあっても恨みはありません” 現郡山市長品川萬里氏の言葉。

その遺徳遥かなり

安積開拓事業の礎となる

(天台宗大雄山南泉院住職)

「独立独歩」

十五代 沈 壽官



先日、ラジオを聞いていたら、懐かしい声が聞こえてきた。宮田輝アナウンサー、NHKの歴史に残る方で確か国会議員にもなられた方でもある。

番組のタイトルは覚えていないが、京都の木津川に関する番組で地元の方と対談されておられた。

何気なく聞いていたが面白かった。特にこんな件である。

「この木津川は毎年三名ほど子供が溺れ死によります。皆が泳げるようにせなあきま

せんなあ」と言う地元の方に宮田アナが、「そうですね。皆が泳げるようにならなければいけませんね」とさりと返している。

今なら、どうだろう。

毎年、三人も子供が水浴びをしていて亡くなるとなると、当然ながら「遊泳禁止」となるに違いない。

それを、皆がこの激流を泳ぎきれるようにならなければいけませんね、と語る大人達。

このポジティブで逞しい思想があの頃の日本には存在した。その中で育った子供たちは、心身共に逞しく、かつ危険に対して慎重で注意深くなった。

経験させないで、無事に大人になった人と、危険を予知できる経験を積んだ人とはまるで違う。

この話はまだ続き、確か宮田アナが

「そうなるオリンピック選手も育つかも知れませんか」と言うと、地元の方は苦もなく「そうですね。そんなのに放り込んでみましようか」と言つてのける。

思わず声を出して笑つてしまった。

強く逞しい日本があつた。

そんな折、荷物を整理していたら13代婦人沈ハマノ（浜野）が76歳の時、息子である14代沈壽官に向けて書いた習字を見つけた。当時、父は50歳をとうに越えているが、そこには「独立独歩」と書かれてあつた。

常に最愛の息子に向けられる厳しい視線。逞しく自立して欲しいと願う本物の愛情を感じた。

この13代婦人はいくつものエピソードを持つ。

以前、テレビマンユニオンの「遠くへ行きたい」という番組のロケが来たことがある。旅をするのは俳優の渡辺文雄氏。東大卒の俳優で様々な役柄をこなした名優である。

彼が我が家に来着した時、父はまだ配達から帰つていなかった。そこで、この沈ハマノが玄関に小柄で痩せた身体でキッチンと正座して「息子はまだ帰つて来ておりません。しばらくお待ちください」というと、渡辺さんは、軽い気持ちで「薩摩には良か男がたくさんいるらしいですな」と言つた。

すると明治生まれで、女子師範の教師まで勤めた13代婦人は「いいえ、薩摩の良か男の半分は関ヶ原の戦いで死にました。残りの半分は西南の役で亡くなりました。今、薩摩には良か男は一人もおいはん」と言つてのけた。

これを聞いた渡辺さんは言葉を失い、ようやく「薩摩には良かオナゴがおりますなあ」というほかなかった。

孫の私たちにも本当に大きな祖母だった。

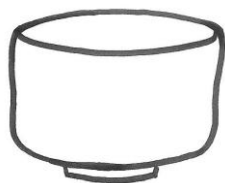
僕には「カズちゃん（僕の名前）。車は婆ちゃんが買ってあげるからね。そのために沢山お金を貯めてるからね。ワーゲンでも何でも好きな車を買いなさい。」と言っていたが、祖母が亡くなり父に話すと36万円の貯金をしていてくれたらしい。そのお金では車は買えない。すると父が「君はこのお金でヨーロッパに行つて来なさい」と言い、僕は学生だけのツアーでヨーロッパの旅をするこゝとが出来た。祖母には36万は大金だったのだ。

沈の家に嫁ぎ、留守がちな夫の代わりに五人の子供達を育てた。畑を耕し、米を育て、

職人と共に働いた。

その人が76歳で息子に贈った「独立独歩」の言葉。

僕も、この言葉を深く心に刻み自分に改めて言い聞かせたものでした。



不思議な力

奥村 太



日本は現在、深刻な少子高齢化社会が進行していると言われています。確かに、私の職場（海上保安庁）でも業務上のニーズに加え、所謂団塊の世代が引退した後の人材確保の必要性が大きな課題となっており、これまで60歳であった定年も段階的に引き上げられ最終的には65歳となる事が数年前に決定しました。科学技術が飛躍的に進歩している現代においても人口は国の力を支える最も基本的な要素であるにも関わらずなかなか効果的な解決策を見出せずにいる現状は非常に由々しき事態であると感じずにはいられません。

と、少し重たい導入となってしまうました

が、今回は別に少子化問題をテーマにしようと考えているわけではありません。実は幸運にも今年の5月に我が家に待望の第一子（名前は「忠久（ただひさ）」と言います）が生まれました。この忠久の誕生までには実に多くの方々からのサポートや励ましを頂いたわけではありますが、その中でも鎌倉時代から連綿と続く入来院家の持つ底知れぬパワーについては感じずにはいられないエピソードが多くありましたので、この機会に思い出話のような形で書いてみたいと思います。

《エピソード1 おじいちゃんの予言①》

私と妻が結婚したのは今から約2年前の2022年3月のことでした。お互い、アラフォーでの結婚だったこともあり、私自身は子供については妻の気持ちを最大限に尊重したいと思っていました。結婚後すぐに転勤となり鹿児島での勤務が始まったわけですが、

私も妻も（愛犬ヤマトも）すぐに鹿児島県の生活環境が気に入って、1年目については鹿児島県内の様々なところを巡り充実した日々を送っていました。やはり生活環境の安定度合いは家庭に与える影響も大きいのか、桜島の力強さに背中を押されるように、2023年の年が明けた頃からどちらからということもなく「やっぱり子供欲しいよね」という会話が始まりました。

その後、お互いの年齢的なこともあったため二人で相談しながら食事やタイミングといった妊活に取り組んでいた2023年の7月、私が示現流で大変お世話になっている有村様からご紹介を頂き、入来院家の重朝おじちゃんと久子さんにお会いすることができました。重朝おじちゃんも久子さんも、初対面の時からそれはそれは親切にして下さり私達夫婦が妊活中であることを話した時もとて

親身に相談に乗って下さいました。その中で、重朝おじちゃんから「大丈夫、この家（入来院家）に來られたのだから、必ず子供はすぐにできる」と太鼓判を押して頂いたのです。やはり鎌倉時代から幾多の時代の変化を乗り越えて現代まで続いている入来院家の現当主直々の言葉は私達夫婦をとて前向きな気持ちにさせてくれました。

普通であれば「この後も妊活を頑張りました・・・」となるところなのですが、入来院家にお邪魔になった直後の妻の検診において、なんと無事に妊娠していることが判明したのです。妻が妊娠したことは真つ先に重朝おじちゃんと久子さんにご報告させて頂きましたが、私達夫婦はこの時から入来院家の持つパワー存在を俄かに信じ始めていました。

《エピソード2 おじちゃんの予言②》

妻が無事に妊娠して以降も、私達夫婦は

重朝おじいちゃんと久子さんのご厚意に甘えて月1回程度の頻度で遊びに行かせて頂いていました。

久子さんは妻の体調を非常に気遣って下さり、妻の些細な体調の変化や気分がすぐれない時の過ごし方など、ご自身のご経験も交えながらお話しくださり、初めての妊娠で色々と不安や悩みを抱えていた私達夫婦にとつては有難い以外の何ものでもありませんでした。

幸運にも妊娠初期において妻の体調はそこまで悪くはなく、入来小学校のお堀の清掃（鯉のつかみ取り等）のお手伝いをさせて頂いたりと入来麓での束の間の時間を満喫するとともに、久子さんの美味しい手料理もたくさん頂くことで、妻の経過も大きなトラブルもなく順調なものでした。

そのような中で、重朝おじいちゃんの二回

目の予言が発動しました。その頃、妻の週数はまだ初期段階でありお腹の子供の性別は当然分かっていなかったもので、重朝おじいちゃんから男の子なのか女の子なのか問われた時も「まだ分かりません」としか答えられなかったのですが、それを聞くなり「男だよ。間違いない。」とのお言葉（予言？）を頂きました。既に妊娠に関する予言の的中を目の当たりにしていた私達夫婦は、この性別に関することも十分にあり得ると信じ始めており、次の検診時において性別が分かるのが楽しみになっていました。

ここまで話をすればもう予想はつくと思いますが、その通り、次の検診時に病院の先生から「男の子だと思いますよ」とのお話を頂きました。これで妊娠に引き続き性別までも的中したことになり、私と妻は入来院家には間違いなく底知れぬパワーがあると信じる

に至りました。

このエピソードにはちよつとしたオチがあります。子供の性別が分かった後に重朝おじいちゃんと久子さんにご報告にあがった際、重朝おじいちゃんからは「男の子とか、良かったな。でも、今は何でも事前に分かっってしまうんだな。神秘性が無いのは残念だな。」とお言葉を頂きましたが、私達夫婦からすると、既に妊娠と性別に関する重朝おじいちゃんとの予言が的中するのを目の当たりにして十分に「神秘性」を感じさせて頂いていました。

《エピソード3 ―貞子さん―》

主なエピソードとしてはこれが最後になります。2024年の年が明け、残念ながら私の仕事の都合で4月に鹿児島から大阪へ転勤することが決まってしまいました。この頃は、妻は既に妊娠7ヶ月目に入っており、大

分お腹も大きくなっており日に日に妻にかかる身体的負担も大きくなっていることが、私の私にも分かるようになってきました。

妻がこの様な時期での転勤であったことから、私達夫婦のもっぱらの懸念事項は、無事に転勤(妻が移動)できるかということと、転勤先で無事に出産できるのかということでした。

引越しの準備等もあることから、鹿児島在住中に入来院家へお邪魔するのは2月が最後となり、この時にこれまでの数々のご親切に對するお礼と転勤のご報告を重朝おじいちゃんと久子さんにさせて頂きました。初めてお会いしてからというもの、ほぼ毎月のようにご厄介になつており、誠に勝手ながら実家に帰るような気持ちでお邪魔させて頂いていた中での転勤だったので、一旦このような形で気軽に会いに来ることができなくなることが

非常に寂しく感じつつも、この時もいつも通り楽しい時間を過ごさせて頂いていました。

入来院家での神秘的な出来事の極め付けが起こったのは正にこのような時でした。

楽しい時間もあつという間に過ぎてしまい、重朝おじいちゃんと久子さん、それと入来院家の御仏壇に帰りのご挨拶をした際にふと会話の中で貞子さん（重朝おじいちゃんの奥様、久子さんのお母様）の話をしている久さんが「お母さん（貞子さん）も必ず見守ってくれているから大丈夫」と妻に声を掛けてくださった時でした。何もないはずの床間の空間に突然スーッと光（煙）の筋が漂い始め、妻の周りを通ったかと思ったらスーッと消えていってしまいました。この不思議な現象は私だけでなくその場にいたみんなが見ていたので、間違いなく起こったことであり、その状況から貞子さんが妻とお腹の子供に

力を授けにきてくれたのだと、信じずにはいられませんでした。

その後、私達夫婦は予定通り大阪に引越し、5月に妻は無事（若干のトラブルはありましたが）に忠久を出産してくれ、忠久も元気に産まれてきてくれました。妊娠後期での長距離の引越しも含めて、妻と子供が無事であったのも、恐らく貞子さんが力を貸してくれたからではないかと私達は思っています。

このように長男忠久が生まれるまでには、入来院家の不思議な力を感じずにはいられない出来事が沢山起こりました。しかも、それらの不思議な体験はどれもポジティブなものばかりで、私達夫婦にとってはとても嬉しい思い出となっています。これは私の勝手な思い込みではありますが、やはり、鎌倉時代から連綿と続いている家というのは何か人智を超えた力があるからなのだと思います。子孫

を残し一族を繁栄させていくということは誰しもが願うことだとは思いますが、思うようにならないのが普通であるところ、数百年に渡り人の思いを繋いでこられた入来院家にはとても不思議な力が宿っているのだと思います。その意味において、最初に重朝おじいちゃんが仰った「この家に來られたのだから・・・」という言葉は正にその通りであると思うのと同時に、そのような縁を頂けたこと、また快く私達を受け入れて頂いたことに心から感謝させて頂きたいと思います。

なお、息子の名前ですが、色々と検討をする中で最後の文字が三画であるのが良いということが分かったことを受け、久子さんに「久」の字を使わせて貰いたい旨ご相談したところ快く快諾して頂きました。その上で、鹿児島島の皆様ならお気付きの方が多いと思いますが、「〇久」というのは島津家のお殿様が

使われてきたお名前であるところ、これまた久子さんから「忠久がいいんじゃない？」とのご提案を受け、僭越ながら奇しくも島津家初代と同じお名前とさせて頂くことになりました。本当に恐れ多いことはありませんが、これで入来院家の久子さんから一字をもらい、島津家初代と同じ名前となりましたので、息子には入来院家及び島津家にあやかっただけの字のとおり「久しく」幸せになってもいいと願うのは親バカでしょうか？いずれにしても、忠久以降、「久」の字は大切にさせて頂こうと思っています。

最後に、冒頭で少子化問題に触れたところではありますが、入来院家が子宝のパワースポットとして近い将来脚光を浴びるのではないかと内心ドキドキしていることをお伝えして、締めめの言葉とさせて頂きます。

（海上保安庁一等海上保安正）

入来院のこと



弁護士・みぞぐち法律事務所

溝口 敬人

私の父方が鹿児島島の氏であると父や叔父から聞いており、叔父からは100頁近くにある「平姓入来院氏系図」の写しをもらっていた。その系図は漢文で書かれており断片的にしか内容を理解できなかったものの、宝治元年（1247年）に渋谷国重の長男・光重が戦功により將軍家から薩摩北部の広大な領地を得て、6人の子のうち長子を相模の本国に残し、次男から六男を薩摩に下向させ、五男・定心が入来院の祖であることはわかった。しかし、26代当主の入来院の寛政5年（1793年）の出来事で終わっているため、

私とどうつながるのかが全くわからなかった。ところが、数年前に鹿児島に初めて行く機会があり、入來の地（薩摩川内市入來町）を訪ねた。そこは、入來麓の武家屋敷群が残っており、城という城跡も残っていた。入來郷土館があると聞いていたので訪ねると、館長が館内を案内してくれた。貴重な郷土の資料が展示されており、中でも赤い鮮やかな陣羽織があり、背に私の家紋と同じ「唐草十文字」の家紋が付いていて、こんな派手な陣羽織を着て鹿児島城に出入りしていたのかと思うと嬉しくなった。館内に入來院の系図が大きく張り出されており、右側の初代の定心のところは私が知っているとおりだった。館長が系図を右から左に説明してくれたが、左端のところを見てびっくりした。祖父・萬五郎の名前が出ていたのだ。館長に祖父である旨を話すと、館長も驚いたようで、系図の縮小版

のコピーをもつてきてくれた。

これを機に入来院のことを調べてみると、昭和5年（1930年）に『入来村史』が発刊され、昭和39年（1964年）に『入来町誌（上巻）』が発刊されていることがわかった。早速、入手した。いずれにも入来院の系図が掲載されており、萬五郎は、27代当主定経の末子とある。しかし、萬五郎が明治7年（1874年）生で、定経は嘉永4年（1854年）に没しており、萬五郎は実は定経の嫡男（28代当主定極）の子で、明治20年（1887年）頃に溝口家の養子となっている。萬五郎は昭和21年（1946年）に亡くなっていて、私はほとんど知らなかったが、漢学の造詣が深く、明治中期に入来の清色小学校の教師を勤めたとある。

『入来村史』は文語文で書かれており、読みにくいが要を得て簡潔である。渋谷重国は

相模の渋谷庄を本拠とし「頼朝に仕へ、武名大に顕はれたり」とある。なかなか魅力的な人物である。平治の乱（1160年）で敗れて所領を失った佐々木秀義とその子ら（定綱、経高、盛綱、高綱）が、藤原秀衡を頼つて奥州へと落ち延びる途中、重国が渋谷庄に引き留めて20年庇護し、秀義を娘婿に迎えている（その間の子が義清）。治承4年（1180年）の頼朝挙兵では、佐々木兄弟は頼朝に従ったが、重国は平氏に対する旧恩から平家方の大庭景親の軍に属した。頼朝が石橋山の戦いで敗れると、景親が重国のもとを訪れ、頼朝に従った佐々木兄弟の妻子を捕らえるよう要請する。これに対し、重国は、次のように述べて拒否した。彼らは年来の芳約があつて扶持を加えてきた。しかし、旧恩のため源家に参じるのを禁ずる理由はない。重国は景親の催しにつき外孫義清を相具して石橋に参じ

たのに、その功を思わずに、定綱らの妻子を捉えよとの命を受けるのは本懐ではないと。景親はその理に伏して帰った。夜になって佐々木兄弟が戻ると、重国がかくまってもてなした『吾妻鏡』治承4年8月26日。『平家物語』には、佐々木四郎高綱が梶原を馬の腹帯で出し抜いて宇治川先陣を遂げ、佐々木三郎盛綱が浅瀬案内を口封じに殺して藤戸の先陣を遂げた機略が語られている。

重国の長男・光重の時に、宝治元年（1247年）の宝治合戦（三浦氏の乱）で北条時頼に味方し、その勲功で薩摩北部の領地を与えられた。光重は、「当時北条氏執権職を以て威権を専らにし、幕府の功臣往々剪除せられるもの多かりしかば、其の機を察し、子孫の為に謀らんには遼遠の地に回避するに如かず」として、長子を本国に残し、その弟5人を薩摩に下向させ、それぞれ家名を建て

させた。その内の五男・定心が入来院の祖である。この下向は、村が移動する位のイメージが実態に近いということ、少なくとも50家500人程度が共に行動し、5人兄弟での移住では少なく見ても2500人を含む集団となったということである（小島摩文編『新薩摩学―中世薩摩の雄 洪谷氏―』321頁「三木清著」）。移動の道筋は、東海道を進み、瀬戸内海航路を使い、海路で九州に西側を回って川内川の河口に上陸したと推定されている。

定心は、宝治2年（1248年）に入薩した後、直ぐに名主・寄田信忠から相論（裁判）を鎌倉に起こされ、建長2年（1250年）4月に、北条時頼及び重時の連署の裁許状が下されている。これは、名主の信忠が新地頭の定心に起請文を差出し服従を誓ったにもかかわらず、定心の下風に立つことを喜ばず、

幕府に訴えたものであるが、定心の勝訴である。裁許状が入来院家文書（82号文書）に残されている。漢文の古文書で、あまりがあるかもしれないが何とか読み解いてみた。

裁許状の冒頭の一字下げた2行がという標題である。3行目は「右対決之」に続き、「如信忠申者」（信忠の申す如く）から訴人（原告）信忠の言い分が記載されている。9行目に「如定心申者」（定心の申す如く）から論人（被告）の言い分が記載されている。そして、12行目の「」の次（4文字目）の「爰如定心所進」（定心所進の如く）以下が裁判所の判断であり、16行目の中程の「」以下が判決主文である。

「然則」の次を書き下し文にすると、「彼名主職においては、秀胤を任ずる時の例、信忠の起請文により、地頭進退なすべきの状、鎌倉殿により、下知の如し」といったところ

だ。先に千葉秀胤が地頭となって横領したとする時に訴訟をせず、また起請文を定心に書き与えており、定心の言い分に理があるとした。この裁許状は、入来院が、その後600年に及んで治める基礎となったものといえる。

13世紀半ば頃は、相模の領地から南九州の地まで村人総出の500人以上にもなる大移動が平穩にされており、また、新地頭に関する争いが実力行使でなく裁判での解決が図られており、一応の安定が見られた時代であったのであろう。



溝口弁護士を偲んで

入来院 久子



昨年の「炉ばたセイ談」(第19号)に、東京の溝口敬人弁護士の社報「そよ風通信」の中の「鎌倉時代の裁判の仕組み」を転載する形で掲載させて頂き、今回、本号では、その溝口弁護士の本題である「入来院について」を掲載させて頂きました。

ですが、皆さまにお伝えせねばならないのは、昨年秋の「炉ばたセイ談」発刊のあと、クリスマスを迎えた後に溝口弁護士は永眠されたのです。

実は、彼は癌を患っていて、その闘病中にご自分のルーツを辿って「入来院」の私にご連絡くださり、前述の原稿を託してくださっ

たのでした。

昨年、原稿をいただいて8月に上京する機会があったので、入来文書の翻訳家である矢吹晋先生と一緒に闘病中の溝口弁護士のご自宅を訪ねましたが、点滴だけの生活だったにも関わらず明るく私たちを迎えてくださり、私たちの訪問を大歓迎してくださりました。

いっぱいお喋りもさせて頂きましたし、秋には主治医を説き伏せて点滴を何本も抱えて、弟の裕太さんに介護してもらいながら入来までお越しになられたのです。車椅子をこちらで用意していたのですが、「大丈夫です！」と言い、杖も突かずに点滴の入ったリュックサックを背負いながら、しつかり歩いて入来の麓を見学されたのには驚きました。

この世を去る前に、ご自分のルーツである本家の入来院のお墓に手を合わせたかったのかもしれません。私は入来院の菩提寺であっ

た寿昌寺跡と入来院本家のお墓をご案内させていただきますました。

その後、クリスマスにお菓子を送ってくださり、お礼の電話をするとう元気な声で「入来院さん！」とお返事くださり、入来を訪問できたことを心から喜んでくださっていたので安心しておりましたが、娘さんからお聞きしたところ、帰宅後やはり無理が祟って起き上がるができなくなったようでした。

それから年明けに、葬儀が終わってから溝口弁護士の評報が届き、お預かりした「入来院について」の原稿は今年と来年の2回に分けて掲載させていただきますと娘さんと弟の裕太さんにお約束した次第です。

今から考えても、あの闘病中に入来を訪問できたというのは奇跡だと思います。それでも、私は思うのです。溝口敬人の中に眠る「入来院の侍魂」が彼をあれだけ凜として勇

ましくご自分の意志を貫いて人生をまっとうできたのだと。そうです。溝口敬人さんは、紛れもなく素晴らしい日本の侍でした。天国の溝口弁護士に、心から追悼の意を表したいと思います。



2023年8月にご自宅を訪問したときの溝口敬人氏（左端）。右端は矢吹晋氏（入来文書翻訳者、横浜市立大学名誉教授）

南国ギャンブラー

「小倉競馬場遠征でよみがえる
鹿大生時代のよき思い出 その2」

串田 達治



まさかまさかの炉ばたセイ談三度目の投稿である。

いつのまにか準レギュラー化されてしまった感があるが、いつも母がお世話になっている編集長からのお願いということもあり、今年も筆を執らせていただいた次第である。

様々な分野で活躍されている諸先輩方の貴重な随筆・論文に混じって私のような下素人が書きたいいかげんな文章が掲載される

ことに今でも不安を覚えるが、前回の焼肉の話に引き続き鹿大生時代の思い出シリーズ第二弾を是非最後まで楽しんでいただきたい。

なお、今回は私の唯一といってもいい趣味である「競馬」にまつわる話である。

.....

私が競馬にハマった経緯というのは、中学生の頃同じ剣道部員だった友人が夏休みにうちに遊びにきた際、たまたま競走馬の育成シミュレーションを目的としたファミコンゲーム（いわゆるダビスタ）を忘れて帰ってしまったからという他愛のない偶然がきっかけだったのだが、和室にぽつんと置き忘れられた、見慣れないそのゲームを試しに起動してみると、画面には赤い屋根の小さな厩舎と一頭の

母馬が繋養された牧場を背景に、これまで一度も経験したことのない魅惑の世界が広がっていた。

さて、この運命の日から徐々に競馬ゲームにのめり込んでいった過程を物語にすると、それこそ一冊の本になってしまったためある程度割愛させていただくが、書店で見つけた種牡馬辞典やら攻略本等からゲーム攻略に必要な知識をほとんどん仕入れたことで夏休みが終る頃には「くしだ牧場」の経営は軌道に乗りまくり、馬主気取りで騎手に対して「先行しろって指示したのになんで後ろから行くんだバカヤロー！」みたいな悪態をつけるくらいにまで急成長した。

このようにすっかりゲームに慣れてくると、自分の指示に従わない架空の騎手どもにフラストレーションが溜まりすぎてしまい、

ついに堪忍袋の緒が切れてしまった串田少年は、今度はプレイヤーが騎手となって愛馬を大レースに勝たせるジョッキーステスゲームをお年玉で購入し、ゲーム内ではあの武豊も足元に及ばないくらい数々の実在する名馬にまたがり、様々なレースに勝ちまくる伝説のジョッキーに生まれ変わったのである。

(ちなみに話が若干脇道に逸れるが、このジョッキーステスゲームがきっかけで乗馬にも興味がわき、鹿大卒業後に全国展開する某大手乗馬クラブに就職し、営業兼インストラクターとして三年ほど騎乗技術を学んだ経験があるため、実は私は本物のサラブレッドを操作して走らせることができちゃったりする。もちろん、今より体重が二十キロほど少なかった二十代の頃の話である)

地元の公立高校に進学する頃には現実の

競馬の世界にもどつぷり浸かり、日曜の午後三時にはほとんど毎週テレビの競馬中継を見ようになった。こうして学業がおろそかになってしまった私が当然のように一度目の大受験に失敗した西暦二千年。この時代の日本競馬界にはのちに「世紀末霸王」と呼ばれる歴史的名馬が現役で活躍していた。

ティエムオペラオー

という名で馬名登録されたその栗毛の牡馬は、鹿児島にゆかりのある二人の人物と深い関わりがある。ともに鹿児島県肝属郡垂水町（現垂水市）出身の幼馴染であった竹園正繼氏と岩元市三氏である。

錦江湾を挟んで鹿児島市の対岸に位置し、桜島とつながった港町で生まれ育った二人の少年は、のちに馬主と騎手という関係で運命

的な再会をはたし、やがて一頭の仔馬と巡り合う。

当時ティエム技研株式会社の代表であった竹園氏が北海道の浦河で見初めたその馬を、騎手引退後調教師として活躍していた岩元氏が預かって鍛え上げ、無事競走馬としてデビューさせたのだ。なんとドラマチックな話であろうか！まあこのあたりの知識はすべて私が昔読んだ競馬雑誌からの受け売りであることを申し添えておく。

そんなこんなで平成十年夏、私が勉強と部活そっちのけで競馬に熱を上げていた高校二年生頃であろうか。ティエムオペラオーは京都競馬場で新馬戦を迎え、一番人氣に支持されるも勝ち馬に引き離されて二着に敗退する華々しいデビューを飾ることはできなかったが、ケガもなく無事に競走馬生活をスタート

させた。

（ちなみにまたまた話が逸れるが、この時オペラオーに勝ったクラシックスステージという馬は、競走馬引退後になんと私が就職した乗馬クラブに引き取られており、入社直後馬房でのんびり餌を食べている姿を偶然目撃してびっくり仰天した。普段の調教で何度か跨ったこともあるが、鞍上の指示に対して従順でとても乗りやすく、初心者向けの馬だった。そりやこれくらい賢くないと、あっさり競馬に勝つ事なんてできないよなと妙に感心したものだ）

ところで、このテイエムオペラオー。競馬に興味ある人もない人も、その名前の響きをどう感じるだろうか。

馬主さんには大変申し訳ないが、かつてくしだ牧場の名オーナーだった（ゲームの世界

で）私が初めてその馬名を聞いた時はオペラオー？なんじゃその名前は**!?**と思つてしまつた。

「テイエム」・・・馬主が経営する会社名から「オペラ」・・・父オペラハウスから

「オー」・・・馬の王にという願いを込めて

そのまんまやないかい!!

自分だったらもつとカッコいい名前をつけるのに・・・と思つたものだが、このオペラオーがどんどん勝ち進み、競馬界隈で有名になるにつれて不思議とだんだん格好いい響きに感じられるようになった。このあたりは小栗のキャップや東海のテイオーや成田のブライアンらに通じるものがある気がする。

とにかくこのオペラオー。べらぼうに勝負強い上、拔群に頭がよかった。勝つときに常

に僅差だったのは馬が「勝った」と思ったらすぐ気を抜く賢さがあったからで、レースで必要以上の力を使わなかったからあれだけ長い間好調を維持し、活躍できたと騎手が述懐している。デビューしてからわずか八か月後には競馬の世界で一番格が高いグレードワン（GI）レースである「皐月賞」に優勝し、一気に世代トップクラスにまで昇り詰めた。

同時期、隣に競馬場があるからという理由で北海道大学を目指していた私だったが、いかんせん当時の学力では旧帝大挑戦などお話にもならず、せめて同じ道内の国立大学ということで単身はるばる十勝平野へ乗り込んで帯広畜産大学を受験したものの結果は不合格。なぜか北の大地は私を拒み続けた。

世間がミレニアム騒ぎに浮かれていた頃、受験戦争に完敗した私は心機一転大阪の予備

校に通い、テレビ・携帯禁止の牢獄のような寮生活を送り、こっそりウインズ梅田（場外馬券売り場）に通いつつもそれなりに勉強した。次なる目標は日本で一番大きな競馬場が近くにある東京農工大。しかし不順すぎる動機がいけなかったのか、またしても不合格。府中の杜は目の前から遠ざかっていった。

そういったわけでなかばやけくそになりながら後期で鹿大農学部に出願し、なんとかか進学できたのだが、競馬場はおろか、ウインズすら存在しない灰まみれの見知らぬ土地で失意を引きずったまま入学式を迎えた私はあきらかに浮いており、そこを合唱部の先輩に狙われた・・・という話は前号の炉ばたセイ談の冒頭にも書かせていただいたところである。

そのように私が何度も入試に負け続け、辛

酸をなめていた頃、この物語の主役であるオペラオーも身体がまだ若かったのか、皐月賞を勝った後五連敗した。しかし、年があけてから霸王はついに覚醒した。

四歳（人間に例えると成人くらい）になった平成十二年二月の京都記念から同年十二月の有馬記念まで通算八回もレースに出走しているが、そのすべてを一番人気で勝ち続けた。特に日本国内で一番格式が高く、レベルの高いGI競走でもある

天皇賞・春	京都芝	三千二百m
宝塚記念	阪神芝	二千二百m
天皇賞・秋	東京芝	二千m
ジャパンカップ	東京芝	二千四百m
有馬記念	中山芝	二千五百m

の五大レースを一年間で全部制覇したことがある馬は令和六年現在においても日本競馬史上ティエムオペラオーただ一頭だけである。ゲームの世界ですらめったにお目にかかれないう不滅の大記録を現実世界の馬が達成してしまったわけだ。

さらに特筆すべきは、この五つのレースのうち、天皇賞・春を除いた残り四つのレースではすべて同じ馬が二着になったことだ。

メイショウドトウ

オペラオーに四連敗した準主役の馬の名であるが、名将怒涛。うん、名前的にはこっちのほうが格好いい。ただしこの馬はアイルランド生まれの外国産なので分かりやすく例えるとハワイ、オアフ島出身の曙みたいな感じだろうか。

つまるところ日本競馬の主要レースのうち、いつ、どこで、どの距離で、どんなメンバーと走っても必ず勝ったのがテイエムオペラオーであり、その腰巾着のように必ず二着になったのがメイショウドトウであった（ちなみにドトウは平成十二年の天皇賞・春には出走していない）。

これがどれほど天文学的な確率か説明するのは難しいが、要するに当時の日本競馬会ではオペラオーとドトウの二頭の実力が他の馬より一枚も二枚も抜きん出ていたのだろう。そして、いつもあとほんの僅かの差でドトウはオペラオーに届かなかった。

.....

さて、前置きがずいぶんと長くなったがそろそろこの物語の本筋に入ることにする。競

馬の楽しみ方は人それぞれだが、やはりそこは公営ギャンブル。売る側は必ず「勝馬投票券」と言い、買う側は必ず「馬券」と呼ぶ有価証券を買ってなんぼの世界であると私は思う。ただしこの有価証券は最初から二十五%の手数料を取られる上、ほとんどの場合は不渡りとなるのであしからず。

バブル崩壊から長らく続く平成不況の真つただ中。競馬の世界ではテレビ中継される大きなレースで特定の二頭がともに出走していた場合、当該二頭の馬券を買うだけで必ず儲かった時代が一年間続いた。もちろん、これまでずっと語ってきたオペラオーとドトウのことだ。

仮にメイショウドトウが伏兵として初めてオペラオーに挑戦した平成十二年の宝塚記念を除いたとして、前述した大レースの馬連（一着と二着に入線する馬二頭を当てる馬

券)の配当金は次のようになる。

①天皇賞・秋・・・⑬—⑮ 四百九十円

(二着⑬オペラオー 二着⑮ドトウ)

②ジャパンカップ・・・⑧—⑬ 八百十円

(二着⑧オペラオー 二着⑬ドトウ)

③有馬記念・・・⑦—⑬ 三百八十円

(二着⑦オペラオー 二着⑬ドトウ)

当時未成年だった私は法律上馬券を買えないことになっているが、もしこの二頭の馬券をお小遣い千円で転がしたとすればどうなったか。

$$4.9 \times 8.1 \times 3.8 \times 1,000 = 150,822$$

なんとなんとこの三レースだけで十五万円の払い戻しである!!こんなに簡単に大金が手に入る財テクがかつてあっただろうか、いやない!!

いわゆる本命党と呼ばれる馬券師にとってこれほど安心して買える軸馬はいないし、もれなく同じヒモがついてくる。逆に穴党の馬券オヤジにとっては万馬券など夢のまた夢。ガチガチの銀行馬券が一年間続いたのだからそれはそれは地獄のような日々だったに違いない。

それでも欲にまみれた疑り深い大人たちは純粋にこの二頭の馬券を買い続けられたかどうか。前述したようにオペラオーはレースでぶつちぎる事はなく、勝つには勝つがいつも辛勝なのである。たしかに四回連続この組み合わせで決まったが、さすがに次はないだろう。そろそろ疲れも出てくるはず。次は大

敗するのではないか。どちらかが沈めば万馬券だ。この二頭ばかりでおもしろくない・・・などなど。

しかし、あらゆる競馬雑誌を読み尽くし、オペラオーが最後まで全力で走らないことを知っていた私は、レースを見返すまでもなく、この二頭の実力が抜けていることを確信していた。この二頭を信じて買い続ければそれだけで儲かるのに!! 当時インターネット投票が普及していなかったことが悔やまれて仕方がない。

鹿大に入学して間もない平成十三年四月二十九日は第百二十三回天皇賞・春が行われた。確か連休で家族が鹿児島に来ていたため、私もバスで市内から入来に遊びに行っていた。当然のように居間のテレビで競馬中継を見ていたら、ちょうどファンファーレが鳴り響い

た頃に祖父もやってきた。

祖父「おお競馬見てるのか。何が勝つんだ」

私「そりゃテイエムオペラオーでしょ。①番の白帽。ていうかこのメンバーならまず負けないと思う。で、二着は黄帽の⑤かな」

祖父「なんでそんなことが分かるんだ」

私「その二頭が強いから、としか言いようがないけど、まあ三分後に分かるよ」

私のそれまでの競馬人生でこれほど単純かつ会心の予想はなかったかもしれない。三分十六秒後、当たり前のように黄色帽子を引き連れた白帽子があっさりと勝った。

④天皇賞・春・・・①―⑤ 五百円

(一着①オペラオー 二着⑤ドトウ)

祖父「おおうほんとに勝ったな！すごいじゃないか。これは儲かったな。なに？賭けてないのか。何で買ってないんだ」

・・・神様、なんで鹿児島には場外馬券売り場がなかとですか？！

梅雨が明けた六月末。大学生活にも徐々に慣れてきて、所属する合唱サークルでは夏休みに県内各地の小学校を訪問し、演奏やオペレッタ(台詞と踊りのある歌劇)を披露する演奏旅行に参加することになり、西遊記のオペレッタで沙悟浄役を拝命した私が頭に皿をのせて発声練習に励んでいた頃。第四十二回宝塚記念の日を迎えた。

このレースではいつも負け続けていたドトウがついに王様に反旗を翻した!!のび太がジャイアンに渾身の一撃をお見舞いした貴重な瞬間を目撃したのである。過去五回連続の二着でもめげなかったドトウへの祝福か、レース後の観客からの温かい拍手が印象的だった。ただ、馬の組合せは変わらないのでもちろん馬連は最低配当。

⑤宝塚記念・・・③―④ 二百十円

(一着③ドトウ 二着④オペラオー)

ここまで飽きずに読んで頂いた方は、いかげんしつこいと思われるかもしれないが何度も繰り返し言う。前年の宝塚記念からまるまる一年間、GIレースで都合六度にわたって同一馬どうしによるワンツー決着が延々繰り返されたというのは日本競馬史において

も前例がない。

二度あることは三度あるどころの話ではない。ここまで結果で証明してしまえば、これはもう競馬の法則と言っても過言ではないのかもしれない。

ああ、一度でいいから競馬場で神に選ばれた二頭を生で見てみたい・・・

いや贅沢は言うまい。せめて場外馬券場のモニター越しにこの二頭を応援したい・・・いやいや、どうせ場外馬券場に行くのならこの二頭の馬券を買って一刻も早く恩恵にあやかりたい!!

しかし、サークル活動の部費や飲み会代を払いながら残りのバイト代で競馬場はおろか県外のウインズに行くための交通費を捻出するのさえ当時の私には厳しかった（そもそも接客に向いてなかったため、下宿先からほど近い焼肉屋のバイトもすぐやめた）

抑えきれない煩悩を抱えながら無事演奏旅行も終わり、いざ鹿大祭に向けて準備を始めようとしていた平成十三年の秋、ついに、ついに千載一遇の機会が私の目の前に転がりこんできた。

同じ合唱サークルでほとんど話したことのない四年生のある先輩が実は隠れ競馬ファンであることが判明し、免許も車も持っているその先輩から今度の天皇賞当日小倉競馬場へ一緒に行かないかと誘われたのだ。

なんでもっと早く競馬好きって言うてくれなかったんですか先輩!!

天皇賞が行われるのは東京競馬場だが、競馬を開催していないローカル競馬場でも入場はもちろん、レースはゴール前的大型ビジョ

ンで観戦できる。当然馬券も購入可能だ。私が提唱する「TM（ティエム・メイショウ）の法則」を検証するため、むしろこちらから是非連れて行つて下さいと懇願した。

有頂天になった私はサークルの同期や先輩たちに事あるごとに近々はるばる小倉競馬場へ遠征するので興味があつたら代わりに馬券買つてきましようかと触れ回った。

競馬を知らない部員がほとんどだったので、私がこれまで延々書いてきた文章の内容そのまま「TMの法則」の論理的整合性を懇切丁寧に説明し、徐々に信者を増やした。

「今度の天皇賞、あなたの資金を倍にしてさしあげます」

最終的にTM教の教祖となった私は、後日詐欺で訴えられても文句の言えないような勧

誘が功を奏し、バイト給料日前の金欠集団に囲まれ、残りわずかな生活費を託された。

かくしてサークルのみんなが元氣玉よろしくオラに少しずつわけてくれた現金の一部をガソリン代として先輩に渡し、ありつたものの夢を我がTM教が崇拜する神・ティエムオペラオーと、その宿敵メイショウドトウにすべて捧げることにしたのだった。

平成十三年十月二十八日正午。鹿児島から四時間ほどかけて現地に到着した私は、初めて目にする競馬場の大きさに圧倒された。まさかこの場所が十数年後に自宅から最寄りのホームグラウンドになろうとは当時夢にも思わなかったが・・・

小倉までの道中は運転してくれている先輩や、前号の焼肉事件でも登場した栃木出身

の同級生（競馬好き）らと競馬の話で大変盛り上がったが、当然ながら天皇賞に関しては一切予想をしなかった。勝つのはオペラオーかドトウ、二着はオペラオーかドトウとTM教の教典に書いてあるから。

二枠②番 メイショウドトウ

五枠⑥番 テイエムオペラオー

二頭の馬連オッズを確認すると、なんと三倍もついていた。この馬連②―⑥の馬券的中することを信じて疑わなかった私は、先輩に帰りは天神あたりに寄って豪遊しましょうなどと提案したりした。

さあ、まもなくGIのファンファーレだ!!

レースが始まって以降の事は興奮しすぎ

ためただろうか、実はあんまり記憶に残っていないが、それでもモニター画面の真ん前で最後の直線、死力を振り絞って逃げるドトウを外からオペラオーが豪快に抜き去った時は心の底から震えた。やはり思った通りこの二頭だ!! オペラオーだ!! ドトウもがんばれ!! うおおく突き放した!! オペラオーつえ!! そのまま!! そのまま!! そのまま!! そのまま!!

そのまま!! そのま・・・ん!? だれ? だれ!?
⑩番?? だれやおまえ!! おい!! おい!!
やめろ!! やめろつて!! いやあ~~~~!!

パパからもらったクラリネットをぶっ壊しちゃった時のような絶叫が競馬場に響いた。鼻と目から同時に出血したかと思ったが透明な液体だったのでおそらく鼻水と涙だったの

だろう。マジで憤死するかと思った。

⑥天皇賞・秋・・・⑥―⑩二千七百九十円

一着⑩アグネスデジタル

二着⑥テイエムオペラオー

三着②メイショウドトウ

この悪夢以来、競馬に絶対はない教に入信し、どんなに強い馬が現れても常にその実力を疑い、あらを探し、ケチをつけるようになった。しかしこの宗旨替えはタイミング的に最悪であった。そう遠くない未来において、ある馬に逆らい続けたせいで私は再び金銭的に大ダメージを被るはめになる。その最強馬、競馬界の至宝、ディープリンパクトがこの世に誕生するわずか五か月前の物語である。

(福岡県土地家屋調査士会 久留米支部

副支部長)



『発掘少年の恋？』

高原のお嬢さん』

白男川 孝仁



その1『第二次上場遺跡調査』

二〇〇七年の出水市教育委員会発行の『市内遺跡（上場遺跡他）発掘調査報告書』によると、池水寛治先生による上場遺跡発掘は、昭和40年4月の第一次調査を皮切りに、昭和42年、昭和43年、昭和46年、昭和49年まで、五回の調査記録が残されている。

第一次調査に、出水中学2年生で参加させていただいたT君も、第二次調査には出水高校1年生の考古学部員として参加した。

25名の参加部員の中には、前回飲酒事件で御迷惑をかけた牛之浜修さんや、前原則子さ

んの姿があつた。

前原女史は、後年早稲田大学吉村作治教授とエジプト考古学で活躍される方で、その事については後述する事とする。

T君ら一年生は、夏休みの『えびの高原キヤンプ』を終えたばかりで、登山疲労もありながらの参加となつた。

三笠中出身の池崎譲二君も、その一人だが彼こそ、九州で最も高名な考古学者の一人となる男である。

四十歳頃であつたろうか？ NHKの教育番組で、『博多の鴻臚館』の紹介があつた。インタビューを受けている責任者こそ、池崎君その人であつた。

福岡城の平和台球場跡に、平安時代より朝鮮使節団の迎賓館としての鴻臚館について、知る人の少ない遺跡であるが、鎖国とされた江戸時代でも、長崎の出島以外に外交があつ

た役所として非常に貴重なものである。

上場の話に戻るが、今回の第二次上場遺跡調査においては、前回の事実をはっきりと裏付けると共に、6層下部にもう一つのナイフ形石器を持たない文化層のある事などが判明した有意義な調査結果となった。

その2 『石飛遺跡^{いしひ}と第三次上場遺跡調査』

一年生の夏休みが第二次調査、翌年の春休みが水俣の石飛遺跡、そして二年生の夏休みが第三次調査となる多忙なスケジュールの最中であつた。

出水市の皆さんからすると、大川内から上がって行く上場高原と、水俣市の湯の鶴温泉など、懸け離れた僻地同士に思えるが、実は高台同士で直線で5キロも離れていない。

事実、我々も上場から徒歩で湯の鶴温泉經由で、石飛に行った事がある。

縄文以前の旧石器人にしてみれば、隣保班といった処であらうか。

石飛遺跡発掘は、水俣市石坂川石飛分校という小学校に宿泊しての作業であつたが、当時は『えびの群発地震』の最盛期で、夜中に何度も恐い思いをしたものだ。

調査内容については、地層や遺物の出土情況も上場と酷似していて、旧石器文化遺跡として証明された。

発掘現場は景色の素晴らしい『亀齡峠^{きらいとうげ}』の近くで、水俣市内からの観光客も多かった。

さて、前原女史の話に戻るが、近年でも出水高校考古学部員達は、『もぐら会』として旧交を暖める機会を頂くが、早稲田大学吉村教授から、トレーシングの技術の高さを評価して頂いての事だったと伺った。

トレースとは遺物の写生であるが、写真の添付ではなく、学術記録として手書きの詳細

模写が必要とされるので、今回の寄稿にトレーニングを添付しておく事とする。

昼間の発掘そのものが、大変な作業ではあるが、調査した事実を学術的記録として残さねば徒勞となるので、作業日報としての報告書の作成とか、精密なトレーニングなど、学術経験者の卵としての修業が始まる。

出水高校考古学部は、池水寛治先生の厳しい指導の下、先輩方から教えを受け継いでいる。部誌『もぐら』に、I君の狸山遺跡の報告書が記載されているので見てみよう。

その3『狸山遺跡調査概要』

当遺跡は、今回の第三次調査の本部地点である上場小学校前遺跡地より北に2kmの舌状台地で、熊本県との県境付近に位置する。

付近は以前より縄文早、前期遺跡と考えられていたが、昭和40年6月池水寛治先生らの調査により、早期の山形文・穀粒文、前期の

土器式、中期の阿高式、その他旧石器を裏付ける黒曜石剥片の出土により、上場小学校前遺跡と同様に旧石器遺跡である事が明らかになった。云々。

高校二年生にしてはキチンとしたI君の調査概要であるが、実は片岡英治先輩のレクチャーあつての事である事を告白しておく。

R・Cサクセションの忌野清志郎の作品に『僕の好きな先生』という曲がある。

『煙草と絵の具の匂い♪』とはまさに池水寛治先生であり、熊大に進学され教職を全うされた片岡英治先輩に他ならない。

凄い文学的才能をお持ちで、I君の報告書の指導もして頂いたが、笑える程チャランポランな性格でもいらつしやつた。

学校である時呼び出しがあり、『今夜、出水駅に修学旅行列車が停車するので、必ずプラットホームで笑顔で手を振るように!』と

変なご依頼であつたが、驚いた事に片岡先輩は、T君の名前と写真を使つて大阪の女子高生と文通をしていたのだ。

仰せの通り笑顔で手を振つたが、お相手は分からなかつた。

その後の文通も続けるよう言われたので、翌三年生の夏休みには、ヒッチハイクで東大阪市の彼女の家まで訪ねたが、交際はそれっきりだつた。

当時の文通交際とは、もともとそんなものであつたのかも知れない。

その4『高原のお嬢さん』

第三次上場遺跡調査の一環として、狸山遺跡調査を担当した事は、報告書に記した通りだが、ある日不思議な事が起つた。

狸山での出土が芳しくなく、先輩方は現場にT君だけを残して調査に出掛けた。

けだるい暑さの中で、独り掘り続けるT君

であつたが、ふと気がつくとき白いパラソルの少女が見学していた。同い年位であろうか自宅近くの畑で毎日穴掘りをしている少年にいろいろと質問を始めた。

小学校の近くで近年発掘が続いている事はご存知だったが、一般の方々からすると、土の中から昔の物を掘り出してどうするの？、何になるの？、であつたろうが、T君が丁寧にお答えしているうちに、何度も通つて来て下さるようになった。

しかし、良い事ばかりは長く続かない。

三年生の中浦隆義なつら たかよしさんに遠目に見つかつたらしく、上場小学校に戻つて整理作業をしていると、『T君！高原のお嬢さんとヨロシクやつてゐるねえ。』と、声を掛けられた。

高原のお嬢さんとは言い得て妙ではあるが一緒に片付をして下さつていた三年生の山崎真知子やまざき まちこさんも、『あら、T君にはそんな良い

事があつてたの?』と、コロコロと笑つていらつしやる。

なんと、間の悪い中浦先輩であろうか。

山崎真知子先輩こそ、中学生の頃から憧れの方で、今日初めて二人きりの作業中の事であつたのだ。

恋愛感情と言えば、あまりに薄っぺらく、失礼に当たるので、お断りしておくが、あくまで遠い憧れとして敬愛させて頂いていたのだ。その感覚は老人となつた今でも変わらずにいる。

当時、舟木一夫の『高原のお嬢さん』が流行っていたので、『T君の恋物語』として噂話が盛り上がっていたようだが、狸山地点での発掘が終了すると、有難い事にその噂話も自然消滅してしまつた。

その5『最後に』

池水寛治先生のお蔭で、中学生時代から有

意義な経験をさせて頂いたが、部誌『もぐら』の創刊号から第10号を参考に、池水寛治先生と部員達の活動記録など話しておきたい。

出水高校考古学部の第一期生の卒業が昭和37年であるので、当然それ以前からの活動が推測される。

大掛りな発掘調査としては、薩摩川内市の国府、国分寺と、長島の古墳群発掘調査が、昭和40年に行なわれているが、壮大な上場発掘計画を前にしての事前調査なども、盛んに行われていたであろう。

前述の池崎讓二君や前原則子さんだけでなく、北海道の西田茂先輩、上屋真一君など、高名であるが、三年後輩の脇岡隆夫君は、古文書解読で右に出る者は無く、同学年の桐野作人さんなど、今や日本の歴史作家の代表として、出水市でのご講演も大盛況であつた。

また出水市内の高速道路工事前の遺跡調

査については、長野真一先輩が、ほぼ全区域の発掘を終えていらつしやる。

この様な部員達の活躍を、誰より喜んでいらつしやるのが、亡き池水寛治先生であろう。さて、昭和55年のご逝去の際は、出水からも多くのご参列があつたが、今年で43年目となるようだ。

忌日記念祭が五十年忌とすると、六年後の事であろうが、『もぐら会』の先輩方を中心に、広く連絡を取り合つて、池水寛治先生の御遺徳を偲び、改めて御実績を顕彰出来れば、と考えている。

拝

付記「お詫び」

当初は、少年の発掘物語を連続掲載する気ではなかつたので、お詫び申し上げておきたい。

昨年、渋谷五族の祁答院家に縁の知人か

ら、中世薩摩の雄・渋谷氏『新薩摩学』という本をお借りする事が出来た。

鹿児島純心女子大学教授の小島摩文氏こじま まふみの編集で、七名の先生方の共著であるが、桓武天皇からの系図に渋谷氏の祖・『基家』が明記されている。

薩摩に下向した渋谷一族の東郷家七代目に『右重』が居るが、弟『重頼』に白男川祖との記述を見つけ、欣喜雀躍であつた。

また、荒田邦子先生あらた くにこの年表に一三七六年から一四一一年頃の『重頼』の活躍が記載されていたので、清色城奪回等について、皆様の詳細をご報告したいと考えていた。

しかしながら、東郷家『重頼』と同時代に入来院家七代目当主『重頼』記述を見つけたので、詳細を再確認した結果、『重頼の活躍』についての記述は全て入来院家当主『重頼』の記述であり、白男川祖『重頼』のものでは

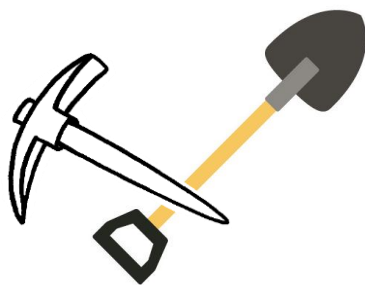
無い事が分かった。

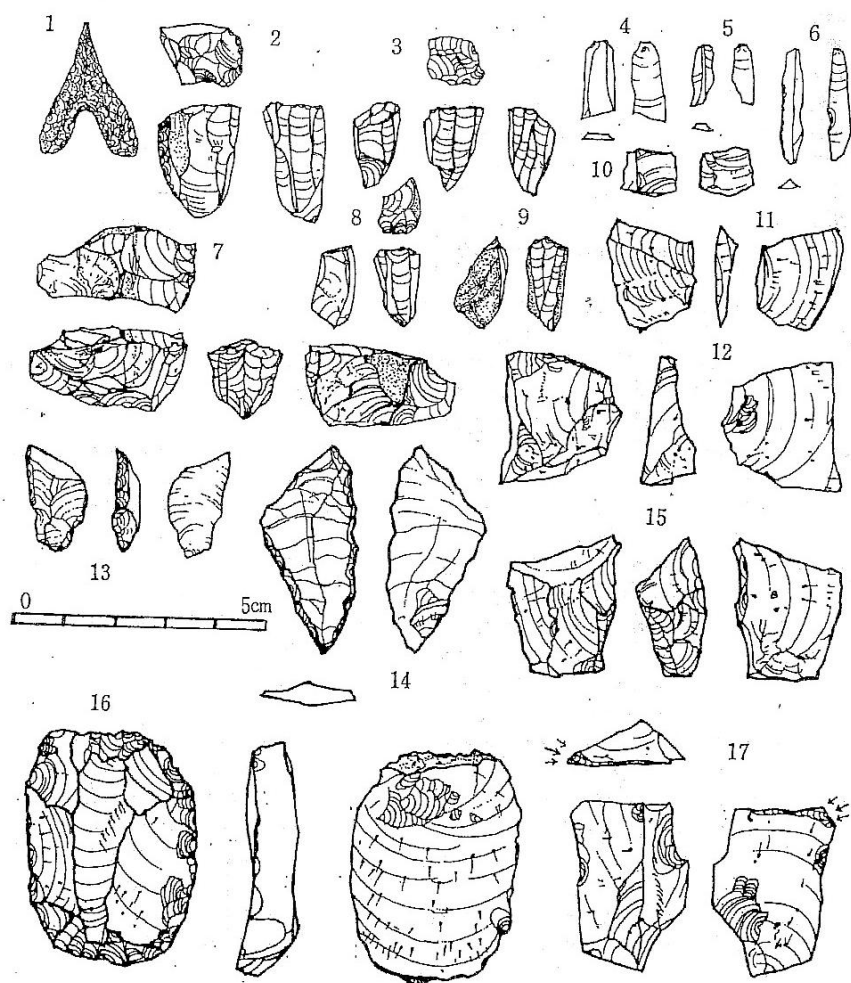
大変な恥かきをする処であつたが、この方面にお詳しい下土橋様に先づ『新薩摩学』を見て頂き、何らかの教えをいただけたらと、考えている。

また、祁答院家宛に郵送された封筒は、入来院貞子様の差し出しとなっており、宛名の文字など、皆様にとって懐かしいものであらうと思う、入来院家に持参したいと考えている。

しらおがわ・たかひと

出水市文化協会 理事
俳句結社 河鹿 同人





上場遺跡出土の石器（2層・3層・4層）

1～2 上層 2. 3～2下層 4. 5. 6. 10～2. 3層 7. 3上層 8. 3層
9. 11. 12～3下層 13. 14. 15. 16. 17～4層 鹿兒島考古 第9号

「おもてなしの心」は
日々のディテールに宿る
顧客を感動させる取組とは

奈良迫 英光



一、はじめに

日本における最大のテーマパークである
TDL（東京ディズニーランド）には、毎年
3000万人以上の入場者があり、そのうち
95%がリピーターです。ゲスト（入場者）
に最高の満足を提供すべくキャスト（従業員）
には16の秘密のルールが徹底されています。

ゲストから問われても「わかりません」は
言わない。服装は常に清潔に。指のネイル、
ボディアートは禁止、髪の高さは決められて
いる。園内に落ちているゴミは、ゲストとぶ

つからないように器具で救う感じで、腰を折
らないで拾う、指差しは厳禁で2本か指全体
で方向を示す、子供とは腰を落として同じ目
線で話す等です。キャストがゲストを夢の世
界へ案内すべく基本が徹底されています。

2028年にはディズニークルーズがス
タートします。さらなる人気が出るでしょう。
TDL入園の際は本物のおもてなしに触
れてください。

ところで職場では多くの訪問客があり、帰
られる際出口までお送りする機会もあると思
います。顧客をエレベーターまで案内し、頭
を下げ扉が閉まって帰ろうとすると急に扉が
開くことがあります。下りを確認してから場
を離れることを習慣とすべきです。

駅のホームで顧客を見送るときは電車が
動き出して、電車が見えなくなつてからホー
ムを離れることが大切ではないかと感じます。



シンデレラ城（TDLのHPより）

客は車中から相手の行動を見えています。

宿泊施設では、かつては玄関前に宿泊名をボードに書くことで歓迎の意を表していました。個人情報保護の関係もあり、団体以外は宿泊者名を書かなくなっています。

「送迎」という言葉がありますが、特に送りの際に気を付けています。宿泊客への感動の取組を紹介します

二、琴線に触れる対応・・・後姿を見送る ①指宿温泉S旅館のおもてなし

S旅館は、業界誌が毎年行っている「プロが選ぶ日本のホテル・旅館100選」の料理部門で40年連続1位、総合評価でも常に上位にランクされています。到着時にはメイドさんが三つ指についてお迎えます。また、洗面所には人数分の色分けしたタオルと歯磨きセット、和と洋の別々のトイレ、幼児用のオマル、浴場の履物入れ棚はスリッパを間違

わないよう、「いろはにほへと」の文字がかかれており、細かい部分に気配りがされているます。

旅館の会長さんから心温まる話を聞きました。ある年配の夫婦が宿泊したいと部屋の下見に昼間来店された。メイドさんが丁寧に部屋を案内し、その間脱いだ履物はきちんと磨いて並べて置いた。お客さんは別に不満があったわけではなかったが、他のホテルも見たいと言って帰られ、その際従業員は宿泊者と同じようにお送りをしました。

ところが数分すると夫婦の車が引き返してきて、やはり泊めてくださいとお願いされたと。帰り際に話を伺ったところ、「車から後ろを振り返ると予約もしていないのに見えなくなるまで手を振ってくれて、その姿に感動しこのホテルなら間違いはない」と宿泊先に決めたとのこと。実際に宿泊された際もき

め細かなサービスに感激し、その後もずっとホテルのリピーターになっているとのことです。

②世界遺産の島、屋久島のJホテルのお見送り

オーブンもない屋久島のJホテルの支配人の話。朝全員並んで団体のバスを見送り、見えなくなったところで「ありがとうございました」と深々と頭を下げました。その光景を三階のベランダ越しに見ていたある社長さんが降りてきて、どうして見えなくなったバスに頭を下げるのですかと聞くと、来館の感謝の気持ちと、これからの旅のご無事を祈っている。支配人は「人は気づかないところでもいつも誰かに見られている。人がいない場所でも手抜きせず、一生懸命に業務に励むことが大切である。」と従業員に日頃から教育・指導を徹底しているという。日々の指導

の成果が行動に表れています。(Jホテルは名称変更になっています)

二つの施設は、従業員が「おもてなしの心」を持って顧客に接し、そのことがお客様の評価として表れていると思います。

三、加賀屋の流儀

能登半島地震で管内の多くの市町村が被害を受け、再建に向けて今必死に取り組んでいます。七尾湾に面し、全国有数の高級温泉街として知られるのが和倉温泉です。その中でも旅館「加賀屋」は、「プロが選ぶ日本のホテル・旅館100選」の総合部門で、35年間第1位の表彰を受けている日本を代表する旅館の一つです。

加賀屋は客室数248、総宿泊客室定員が1450人、年間宿泊者は約22万人、客室稼働率は70〜80%であり、それを従業員650人で支えています。(コロナ前2019



旅館の迎え



旅館の送り

年実績）徹底したサービス精神が、口コミで伝わり国内外から高い評価を得ています。

企業理念として「笑顔で気働き」を掲げ、「おもてなしのサービス」を最大の商品として位置づけ、宿泊者に対し最高のおもてなしを提供することを目指しています。女将が客室に向向いて挨拶するなどトップ自らおもてなしを実践しています。

お客様の来館の目的を事前に察知すれば、可能な限りそれに沿ったサービスを提供しています。還暦の旅行と知れば、赤い帽子や服装の準備を、法事の等に関する旅行では、亡くなった人のために「陰膳」を準備します。期待を超えるサービスを、お客様から言われる前に提供して行くことを徹底しているのが加賀屋の流儀です。

また、過去に宿泊した顧客のデータベースを進め、サービス提供につなげています。

人は自分の名前を呼ばれた時に、その存在を認められたものとして、喜びを感じるものですが、一度の出会いで感動を提供し、リピーターにするべく積極的に相手の名前と顔を知ることにも努めています。

寝床の枕の硬さの具合、菓を常用される方の部屋には氷無しの水だけのポット、アレルギーの有無、食事の好き嫌い等事前のチェックを十分行っています。

お客様が到着してお部屋に案内するまでの間に、館内の説明や翌日の予定を聞きの確な方法でサービスを提供できるよう心がけています。体の不自由な方が、翌日の指定券が取れていない場合は、乗車予定の列車の席を確保する為、前の駅まで職員が行きそこで自由席に座り、「和倉温泉駅」で交代してその席に座らせる努力も惜しまない。

加賀屋では料理の運搬等の機械化を進め、

客室係がお客様にサービスを提供する時間をできるだけ長く確保できるよう改善を図っています。そのことで盛り付けの崩れや食器等の破損も少なくなるなどの効果も生まれています。

従業員の定着や子供の教育環境改善にも努めており、企業内保育所の設置や母子家庭の住宅も併設されています。そのことが客室係にとっては、おもてなしに専念できる精神的な支えとなっています。

誰がやっても同じサービスを提供できる仕組みづくりや、経験豊かな客室係が、新しく入ってきた客室係に伝承していくことなど社員教育にも目頃から取組んでいます。年間3万通のアンケートを分析し、指摘された課題は速やかに対応し、お褒めの言葉は掲示するようにして、すべての従業員が共有できるようにしています。

また、従業員の仕事の効率化をすすめ、チェックアウト時は人手が要するため、フロントや売店やコーヒーションショップ等へ作業の支援を行っています。人をお送りするとき細かい対応がなされています。

「お客様の思い」を具体的な「こと」に変えて提供することが、「価格」を超えた「感動」を生みます。それは人の行動であり、これこそがホスピタリティです。

四、家庭での来客の対応

家に主人が不意の客を連れてきて戸惑うことがあるのではないだろうか。長居し夜更けに客が帰ると、玄関を出た後灯りを「バチッ」とすぐ消してしまうこともあるのではないかと思います。

家族に連絡もなく客をつれてきた夫が悪いのは理解できます。客にとつてみると玄関を出た後すぐに灯りが消えると、自分は招か

ざる客であつたという後悔の念が残るのではないのでしょうか。

客は玄関を出て、しばらくしてから訪問先を振り返ることがよくあり、玄関に灯りがついていると気持ちがなごみます。玄関から道路に出て客を見送り、歩き出して客が角を曲がり見えなくなつてから帰路の無事を祈つて頭を下げ、家の中に入り灯りを消すぐらいのおおらかな気持ちを持ちたいものです。ちょっとした気遣いが人を感動させます。

五、終わりに

「リピーター」を創出することは、たくさんある選択肢の中の一つに加えてもらうことです。サービ스에接する時、お客様はこれまでの体験から事前期待を持ちます。この期待を超えたところに感動が生まれます。

従業員一人ひとりが、感動・感激を与えるサービ스를提供するという自信と誇りを持つ

ていることが、施設への信用となります。

鹿児島県では、観光客を温かく迎える「観光まごころ県民運動」を展開しています。しかしながら企業、職場によって取組みに差があります。

「司馬遷」の「史記」の中に「桃李もの言わざれども下自から蹊を成す」という言葉があります。信頼される施設、感動を提供できる人のいる所には自然と人は行きます。「おもてなしの心」の醸成に向けて、日頃から全従業員で取組む必要性を感じます。

和食はユネスコの世界の無形文化遺産に登録されています。日本文化の魅力が浸透しインバウンドが急増し今年は過去最高に達すると思います。日本の芸術・文化（和食、日本旅館、世界遺産、日本遺産、伝統芸能、茶道、華道、祭り、作法等）に触れる機会を提供することが求められます。また、高品質を

売りとする宿泊施設の稼働や富裕層の動きが顕著となっており、それに合わせて従業員の教育も大切になっています。

日本は成熟社会を迎え「モノ」の豊かさより「心」の豊かさが求められる時代となっています。何気ない「温かいおもてなしの心」は日々のディテールに宿るのではないでしょう

（元鹿児島県観光プロデューサー）

【参考図書】

- （１） 細井 勝・著『加賀屋の流儀 極上のおもてなしとは』（PHP研究所）
- （２） 内藤 耕・著『最強のサービス』の教科書』（講談社現代新書）



時間は平等なのか？



米森 寿美男

最近、昔は一年が長かったとか、年取ると短く感じるなど、年齢に対する恐怖感が少しずつ高まって来るように感じる。健康寿命が七十二歳であるとすれば、残された時間は長くはないので、今出来ることをしっかりとやり切ろうと思う。

孫の一年と比べながら、自分の七〇分の一年のトピックスを書いてみる。

一、孫の二歳の誕生日

二人目の孫は七月三〇日で一歳の誕生日を迎えた。やっと一年過ぎたところであるが、毎日のように接していると凄い成長を見せてくれるのが楽しみである。昨年生まれて、あ

んなに小さかったのに身長は一・五倍に、体重は二・五倍になるなど、成長著しいところである。今はよちよちと歩けるまでになってくれたが、あんなに小さかったのに笑ったとか、泣いたとか、ごろごろが、はいはいが出来たとか、掴まり立ちが、三步あるいたとか、本当にこの一年間のその一瞬に感動と笑いを与えてくれている。

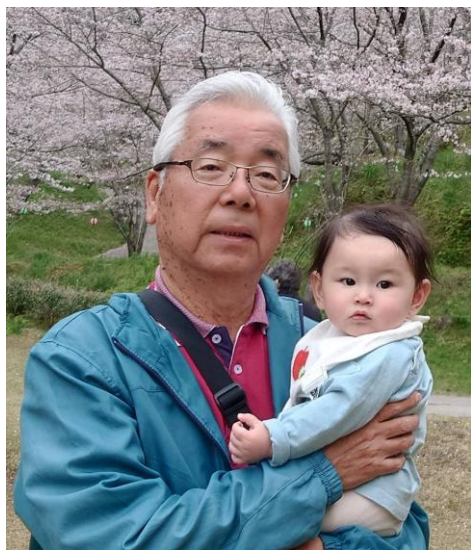
この期間に同じ時間を経験しているのであるが、孫の成長は凄いと思うことばかりである。

這えば立て、立てば歩めの親心（祖父心）とは、良く言ったものだと感じるばかりである。

二、農業の一年間

晴耕雨読とは、のんびり聞こえるが、雨が續くと心配になり、晴れが續くとやる事がいつばい出てきて困るのが農業かなと思う。

さて、自分の一年間はどうかであったかと振り返ってみると、農業では失敗ばかりで、昨年の夏に蒔いた蕎麦は秋に収穫したが、思っていたのと違って半分も穫れなかった。今年の春の小麦に至っては酷い状態であり、しっかりとした準備が必要であると教えられ、一年に一回しか植えることができないので農業は本当に難しいと思う。



桜の観音が池で孫と筆者

他の野菜は、春先から、夏にかけて色々な種類を収穫出来たのだが、水やりや肥料やりが大変である。形のいい野菜を買った方が安くつくのではと考える。しかし、形は悪くても無農薬で作ったものは、安心して食べる事ができるということが最高の瞬間である。

三、念願の出雲大社へ、足立美術館と石見銀山の旅（十一月七日〜九日）

長年の懸案事項を片付けようと山口県から島根県、鳥取県への旅を企画し、女房殿のご機嫌を伺いつつ旅を楽しんだ。山口市がニューヨークタイムズ紙の「二〇二四年に行くべき五二カ所」に選ばれる前ではあったが、それ以前にちょうど訪れることができて本当に良かった。ススキが原の秋吉台を巡り、BSで放送された火野正平さんが自転車旅で訪れたきれいな水が自噴する「別府弁天池」を訪れ、夜は湯田温泉に浸り、ゆつくりと泊



きれいな水が自噴する別府弁天池

まることができた。二日目は石見銀山の古い町並みを巡り、念願の出雲大社へ、連れ添って四〇年となる女房殿に感謝を込めてお参りを果たすことができた。宍道湖畔に泊まり、三日目は境港の水木しげるロードで鬼太郎の世界を満喫して、素晴らしい庭園を見せる足立美術館へ行つて大いに感動させてもらった。

帰りに瑠璃光寺の五重塔を観に行つたが何と工事中であり、二〇二七年まですっぱりとシートに覆われているとのこと、本当に残念だった。

四、入来の初日の出（六年一月一日）

入来に来て三〇年経つたが、桜島が見えるところがあるとさつま町の先輩から教えられて二〇年ぐらい過ぎ、愛宕山ビスタパークには何回も登つたことがあったのに桜島が見えるとは知らなかった。今年の初日の出を拝みに元旦に娘達と登つて、人の多さにびっくりしてしまった。初日の出が見える方向の右端に桜島が見えていた。いつも自分たちが住んでいる反対側を見下ろしてばかりいたので、そこから桜島が見えることを知らなかった。初日の出と桜島は感動を与えてくれた。愛宕ビスタパークから入来の街並みを見下ろすと心が癒されるのは間違いない。



愛宕ビスターパークからの
初日の出と桜島

五、大学時代の同級生との再会（四月

六日～七日）

この四月に大学の教授をやっていた友達が退官するということで、その退官式に招かれて上京した。ちょうど桜の時期で東京駅に降り立ち、皇居を千鳥ヶ淵に向かって歩き、お堀の桜を満喫し、お茶の水方面に向かって歩いてみると昔懐かしい共立女子大学の講堂前に差し掛かり、ちょうど共立女子大学付属

中学校・高校の入学式が行われているところで賑やかだった。ここは学生時代に「かぐや姫」の解散コンサートを観に来たところだなぁと懐かしく、これから会う同級生の一人と一緒に来たなぁと涙が出そうになった。

大学の記念館で退官祝いが盛大に行われる中で、同級生の六人は五〇年前、まだ十八歳の頃に田舎から出て来て初めての出会いを果たし、仲良くなり元気に今を迎えて再会できたことに歓喜した。学生時代に何を学んだかは別として、麻雀ばかりやっていたなぁと懐かしく思うところである。このメンバーで次はいつ再会出来るだろうかと寂しく思うばかりである。翌日は、新宿御苑に桜を見に行つたが、早い時間に入園したのでゆっくりと桜を觀賞出来て良かった。三〇分遅れたら入場規制になって見ることができなかったと思うとラッキーであり、今を見頃とばかりにソ

メイヨシノが満開で、すでにボタン桜も咲いていた。昔二回ほど「桜を見る会」に招待いただいたことを懐かしく思いながら園内を散策させていただいた。

六、古希の同窓会（五月四日）

中学校の同窓会を伊佐市のカフェ「和」で開催し、一八名が集まり、先生まで参加してくれて大成功だった。楽しい時間が戻ってき



退任式での同級生との再会

たように懐かしいメンバーとの再会は、本当に嬉しい時間となった。三年程前にUターンして古民家を買ひ、コツコツとリフォームしながらカフェをオープンして、田舎に人が集まれる場所を提供したいと道楽で始めたとのことであつたが、我々同級生が集まれる場所を提供してくれたことに感謝・感謝である。

七、一年の短さ

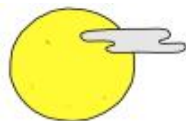
思い出深いトピックスを並べてきたが、これでも日々多くの出来事に遭遇しながら、まだまだ成長していることを感じている。近親者との離別や誰かの入院話など、会うと病気や薬の話ばかりになるのだが、本当に一年の過ぎるのが早くなったと思う。色々とやるべきことが増えたので、あつた言う間に過ぎ去って行くのだろうか。孫を抱きながら、もう少し元気でいたいなあと感じるこの頃である。

（元入来郵便局長）

入来行事考

十五夜（陰曆八月十五日）

中山 とし子



（一）

ああ、はればれとした縁側だ

満月が煌煌と輝いて

まるで真夏の昼間のようだ

庭に影差す 柿の枝々 繊細に

鶏さえ 裏山で餌をついばみそうだ

バラの上には ^(注)しきたり通り

すすきと萩の 寸胴の花入れ

白々とさえわたり

高杯に 月見だんご と ぼたもち

一升枀には 芋 栗 柿にトウモロコシ
なぜか キヤラメル チョコレート
バナナさえ！

ああ、 ふくふくとした 縁側だ

怪しげな一団 頭を揃えて

道端で円陣を組む 山賊らしい

「今年の月は ことのほか大きいから
いいか みんな 用心しろ」

親分のヤスちゃんから小声のゲキが飛ぶ
子分の七人 無言で肯く

手にはビニールの袋

「月はまだ 愛宕山の東だから 焦らな
くてもいいが」

「お供え盗みは 素早く 気付かれぬよう」

まずは 狙う家々の順番と計画を練る

二手に分かれて 村の前からと後ろから

同時に襲う

最後に集まるのは 村の中心三本杉の前

山賊 風のように散らばる

ぬき足 さし足 決して家人に

気付かれぬよう 縁側の下に忍んで

そっと 手だけバラの中へ 差し入れる

心臓は ドッキン ドッキン

焦って 足は ヘナヘナ

気の弱い奴は 木戸口で

こっそり伺うのみ

そんな奴には バナナはやらない！

首尾よくいったら

「そら！ 走れ！」

時には 白い道にながーく伸びている

ゴムのような 黒いヤツ

知らずに踏んで お互いに仰天

つい口に出る ゴメンナサイ！

三本杉の前に集まったら 獲物の分配

キヤラメルが 見たらないね

ちやつかりだれかの 腹の中か？

ああ、はればれとした 縁側だ

月も 煌煌と照っている

今しも 大空のてっぺんに

ああ、ふくふくとした 満月だ

(注二) バラ・・・直径一メートルくらいの竹で編んだ平たいザル

(二)

三々五々 大人達も集まる
村の小さなメイנסトリート

お供え 食べつつ 月を見る

月を見ながら 怪談話

名人のおばあさんの周りに

子供達群がる

おばあさんの火の玉の話は

何度聞いても怖い

「これは ほんとの話」

と 必ず最後に おばあさんは言う

そろそろ 大綱が来る

十五夜のクライマックス 綱引きは

大人と子供衆こどもしゆに分かれて 総勢二十人

くらいの 小さな綱引き

このときばかりは 大人をやつつける
好機！と 子供たちの張り切りよう

大人も決して手加減せず 子供に媚びは
売らない！

「子供こどもな何人？

一、二人抜いてもそかい・・・ナ」

用事ありげに そつと抜けて 応援団に

まわるおじさん

子供達は 気付かないふり

そして なぜか いつも勝つ 子供衆こどもしゆ

だから楽しい 十五夜綱引き

十五夜の行事は、子供時代の何より楽しい
 思い出と言っても良い。この行事が行われて
 いたのは、戸数九軒の「小萩の下こはつしも」と呼ばれ
 ていたとても小さな村の一界限でのことであ
 る。小萩とは「小萩さん」という産婆（助産
 師）さんのお家で、その小萩さんのお家の東
 の方角に位置する家々を「小萩の下」と呼ん
 だ。この界限の子供たちは、ほぼ全員小萩の
 おばさんによって取り上げられている。小萩
 より東の方角だから、「上」のほうが良からう
 と思うが、温泉場からは遠い方向になるので、
 こう呼んだのかもしれない。特別の地域であ
 ったわけではなく、ただ、子供が多かった。
 村人からは揶揄を込めて「小萩の下の子供達こはつしもこどもたち」
 と呼ばれていた。子供が多いと、何かと賑や
 かだから目立つ。子育て世代の親達も、活発
 に行動する機会が多い。鹿児島は郷土教育が
 盛んだったが、その名残が残っていて、私達

はいつも徒党を組んで遊んだ。しつかりした
 年かきのリーダーがおり、上は下の面倒を見
 るのが当然で、下は上の言う事を聞かなけれ
 ばならなかった。「席」と言う言葉を使い、目
 上には「あんたは、わたしより席が上だか
 ら・・・」という言い方をした。戦後生まれ
 の私達の頃は「子供会」があつて、これは小
 学生としての義務で今とさほど変わらない活
 動があつたが、それとは別に「子供衆こどもしゆ」と呼
 ばれた自然発生的な子供の一団があつた。
 「子供衆」は田んぼを駆け回ることができれ
 ばその資格があつたように思う。四才でも五
 才でも。

十五夜が楽しかったのは、一に、盗みの真
 似事が許されていた、というところにあるだ
 ろう。魅惑の夜に、普段は絶対できないこと
 を、そういう行事だから堂々とやれたのであ

る。しかし家人に気付かれないよう、ほんとの泥棒のようにやらなければならないから、結構、頭も体力も使った。円陣を組んで組分けし、計画を立て、見張りを付けたら、物陰に隠れたり、本気でやるのだから皆必死だ。それだからこそ、たまらなく楽しかった。最後にはどの組が一番獲物が多いか、上等を盗んできたかを競うので、誰と組になるかは大问题だった。足の遅い子、恐がりの子、気の合わない子といういろいろだ。しかし、「この子とは嫌だ。」と大っぴらに主張するわけにもいかない。何しろ、毎日のように一緒に行動する兄弟のようなものだし、何かの時には又こちらが助けてもらわなければならない・・・とか、親同士の力関係も、子供とはいえ、微妙に頭の中で配慮した。人間にはいけないことをやってみたいという気持ちで誰にでも潜んでいる。それをここで発散できた。子供達は

各家のお供え物を値踏みもする。大人は子供社会でけなされないよう、ぼたもちの味をひそかに競ったり、子供の好きそうなものを供えたりと、気を使う。子供達に見捨てられたらいかに一種の遊びといえども、やつぱり淋しいものらしい。どっちも神経戦だ。

又、バナナは高級品で、めったに食べられるものではなかったから、バナナを供えてあるのを盗むのは楽しかった。その家は毎年決まっていた。

このころは蛇がよくいた。一日に何匹も見える。土の道を横切るように伸びているのを夜のことでうっかり踏んだ時の感触は今だに足の裏にある。想像するより硬かった。蛇はにぶいのか、急に鎌首を持ち上げることとはなく、悠然と長い体を引きずって藪に消えていった。

十五夜の楽しみその二は、綱引きと相撲である。相撲は消滅が早かった。というのも、男女混合の「子供衆」^{こどもしゅう}なので、いくら普段いばつていても女の子は力で負けることが多く、釣り合いがとれなくて消滅した。というのも、その頃の一家の子供の数は平均三人で、混合相撲にせざるを得ない事情もあった。もともと古い時代、一家に八人も九人も子供がいた頃はもともと繁盛していて、混合相撲にしないで良かったのかもしれない。というより、女の子も相撲をしたのかどうか・・・。

綱引きは、大人が参加する時点までは、大人対子供であったから、皆張り切った。そのうち大人は「飲み方」(晩酌など、焼酎を飲むこと)に忙しく、子供だけになると、男対女だったり、随分工夫したが、何しろ人数が限られているので、成長してだんだん参加が悪くなる、良いリーダーがいなくなる、そん

な形で次第に消滅していったようだ。

今考えると子供の自治組織「子供衆」^{こどもしゅう}は、すばらしかったと思う。親たちは「子供衆」^{こどもしゅう}を信頼していて、下手な口出しはしなかった。そんな暇もなかったのだろうが。子供のこと口出しをすれば、大人からも子供からも軽蔑される、そんな雰囲気があった。何より、子供達は自律的で、大人を真似て「結い」^(注)までした。どこの家も子供は働き手の一人だったから、夕方になると夕食のしたく、家の中、庭の掃除、風呂わかしなど、家事を義務として持っていた。そこで、チームで一件々各家の家事を片づけていく。人数が多いと片づくのも速い。田植えや稲刈りの時、大人が家単位で「結い」をして農事を済ませるのと同じだ。子供たちは、どこの家の中も納戸の中まで知っていた。なぜなら、家の中にかくれんぼをしたりしたから。なんと良き時代であつ

たろう。私の年代の人々は誰もが似たような子供時代を過ごしていたと思うが、人として鍛えられた、幸せな子供時代であつたと思う。勿論、不自由なことは多かったが、不自由であればあるだけ、いつか、いつか、と将来への希望の芽を育てるエネルギーも湧いてきたし、だからこそ、行儀良く仲良く暮らす知恵も持てた。そんな目に見えないものを大切に生きてきた時代がいと美しく、敬意の念と共に想う。

(注二) 結い…「イ」と発音した。共同体の農事や屋根譜きなどを共同で行う、仕事の共同、分担化した形。対等に労働力を交換する。奈良時代から見られる。『角川国語中辞典』

(元日本語教師・エッセイスト)



新納忠元と郷中教育の原点

— 歴史を訪ねる旅 (18) —



下土橋 渡

北を熊本県と接する伊佐市。その市役所の所在地である大口の市街地を見わたす小高い丘に忠元公園がある。県内有数の桜の名所として春には大勢の花見客で賑わう。公園の名前は、戦国時代から江戸時代初期にかけて活躍した薩摩の武将・新納忠元にいろう たけもとに由来する。

公園の奥まった一角に鬱蒼とした木陰がある。そこに鎮座している忠元神社について、鹿児島県神社庁のホームページに次のように紹介がある。

年としに伊佐七ヶ郷は打続く凶作による貧困から脱出しようと、牛馬の導入、用水路・溜池の改修、土地改良、更に前代未聞の川内川下木場下流の開さく、米倉の新設と村起しの気運に燃えた。この精神的拠所として、大口の地頭で島津の名将・知将として親われた新納忠元の神社を創建しようと、藩に天保十三年申請、翌十四年に許可されたので、同十五年二月に忠元の廟所より勧請したものである。忠元社、忠元明神と称されたのち、安政六年忠元大明神と呼ばれた。

神社入口には、案内板と忠元公没後400年記念碑として平成22年(2011年)に奉納された『にせはなしかくきじょうむく二才咄格式定目』の碑が建てられている。二才にせとは15、6歳から24、5歳の青少年を言う薩摩の言葉で、『二才咄格式定目』は忠元公が定めた『青少年が日常守る

江戸末期の天保年間(1831~1845

べき十条からなる規約”であり、案内板に現代語訳で次のように解説がある。

忠元公が定めた二才咄格式定目

青少年の守るべきまじり

- 一、まず武道を修練せよ。
- 二、いつも武道について討論せよ。
- 三、よその人とは用件外の無駄話はするな。
- 四、組織内で十分に話し合いをせよ。
- 五、友だちであつても悪口を言うな。
- 六、分らないときは自分勝手な行動をせず、話し合つて行動せよ。

七、うそを言うな。

八、忠孝の道は、口先だけではなく、人におくれないように実行せよ。

九、山坂に負けない体力をつくれ。

十、二才（にせ、青少年）とは、年齢・体格服装ではなく精神と実行力だ。

新納忠元が生み出したこの青少年教育の指針は、薩摩独自の教育である『郷中教育』の原点と言われる。

一、新納院から志布志へ

宮崎県児湯郡木城町こじょうは、島津氏が太友宗麟を破った1578年の高城川合戦たかしやうがわと、その9年後に秀吉が島津氏を破った根白坂の戦いねしろざかの2つの九州天下分け目の戦いのあつたところである。

その木城町は、明治の町村制施行により椎木村と高城村が合併して発足した合成地名であるが、かつてこの地は新納院にいろういんと呼ばれていた。島津氏4代当主・島津忠宗の四男の島津時久が南北朝時代に新納院の地頭となつてこの地に入り、高城たかしやうを築いて新納氏を名乗ったことに、この地の戦国時代の歴史は始まった。初代より高城を本拠地としていた新納氏であつたが、足利政権内で尊氏と直義兄弟の

争いが起こると、直義方の畠山氏によって高城を追われ本拠地を救仁院くにいん（現在の志布志、松山と有明の東半分を中心とした地域）に移し、2代実久のときに志布志城の松尾城に入った。新納忠元の家系は、この2代実久より分かれた庶流であり、忠元は大永6年（1526年）松尾城で生まれた。

二、新納忠元

新納本家は、8代忠勝のとき周囲の豪族と争い一つも所領を拡大していったが、9代忠茂のときに豊州家や北郷氏らに攻められ、志布志を失って佐土原へ亡命してしまう。

新納本家が佐土原へ追われると、新納本家に仕えていた忠元の父・祐久は、家族ともども伊作島津家（現在の日置市吹上地域の一部）の10代当主・日新公ひしんこう（島津忠良）を頼って行き、出仕する。忠元13歳のときだった。以降、忠元は日新公の庇護のもとで、教育を

受け、日夜修行に励み、文武兼備の名将となる基礎を築いていった。成人すると忠元は、島津貴久と島津義久の2代にわたって仕え、島津氏の三州平定や九州統一の戦いなどで武勇とその名声を轟かせた。

忠元は小柄ながら豪胆な人物であった。永禄12年（1569年）の大口城攻めでは、負傷しているにもかかわらず戦場を駆けて「武勇は鬼神の如し」と評された。その後大口の地頭となり、島津義久公より「武蔵守」を賜り、85歳で亡くなるまで約40年間大口の地を治めた。

島津氏で武功者を数える際に最初に指を折って名前が挙がる人物であったことから「大指武蔵（親指武蔵）」と称されたという。このように「鬼武蔵」の異名で恐れられた一方、和歌や連歌、漢詩に通じ茶の湯も嗜む教養人でもあった。



忠元神社入口の二才咄碑（左）案内板（右）



新納忠元公肖像画（案内板より接写）



鬱蒼とした木陰に鎮座する忠元神社



創建時の本殿鬼瓦と薩摩藩家老・調所笑左衛門広郷が奉納した手水鉢

伊佐市曾木の天堂ヶ尾てんどうがおにある関白陣跡は、天正15年(1587年)5月、豊臣秀吉が島津氏平定のあと、川内泰平寺(現薩摩川内市)から引き揚げる途中野営をし、大口地頭だった新納忠元を引見した陣営の跡である。忠元は秀吉に最後まで反抗し、薩摩隼人の意気を發揮したが、主君島津義久・義弘の命で降伏し、断腸の思いで秀吉に会見した。このときのエピソードは殊に有名である。

剃髪して秀吉の前に進み出た忠元はまだ戦うかと聞かれると「如何に逆らいますしうや」と言った後で、「しかし武蔵は武士ですから主人が戦うなら何時でも立ちます。しかし貴方(秀吉)は安心して良いでしょう。義久は一度主従の約を交わした限りは絶対に裏切りませんから」と薩摩の面目を見せた。

降伏の儀式が終わり酒宴となると、座にいた細川幽斎は忠元が白髭を手でもち上げなが

ら酒盃を呑み干した様子を面白がり、『鼻の下にて鈴虫ぞなく』と詠んだ。すると忠元が、『上髭をちんちろりとひねりあげ』と当意即妙に上の句をつけて返歌し、居並ぶ諸将を感心させたという。

三、日新公じっしんこうの教育

郷中という言葉が使われるようになり郷中教育が完成をみるのは、江戸時代中期の安永年間(1772~1781年)だが、郷中教育のはじまりは、日新公(島津忠良)が試みた青少年の志操教育にあったといわれる。

島津氏中興の祖といわれ、文武兼備の名将だった日新公は、神仏の崇敬篤く、神仏儒の三教を良く学び、『薩摩学』『日学』を提唱し、薩摩独特の士風と文化の基盤を築いた。その内容は、忠孝仁義を説き、この実践を奨励するもので、48歳から55歳の間に作ったといわれる『いろは歌』にその思想が遺憾なく

謳われている。

日新公は、毎月五、六度、諸子の子弟を城中に召集して、四書の講義をし、『義理ノ咄(はなし)』『忠義人ノ咄』などを話して聞かせたといわれる。日新公によつてはじめられたこの『咄』の会合の試みは、日新公の遠逝とともに中断してしまふが、これが新しい形で復活すべき事情が起きてくる。

四、留守居役と二才咄格式定目

にせはなしめくしきじようや

文祿元年(1592年)、太閤秀吉が朝鮮遠征を断行すると、薩摩からも義久公・義弘公・忠恒公を始めとして一万余騎の精兵が朝鮮に渡った。戦争が10年に近い長期間に及ぶに至つて、後に残留した青少年の風紀が乱れてきたのである。この時、留守居役を任されていた新納忠元は、そのことにいたく責任を感じ、風俗改善を決意する。

この目的を達成するために、忠元は、少年

時代に日新公を中心として催された『咄』の会合を思い起こし、青少年たちの間に集団を結成し、その各員が何事に限らず腹藏なく話し会える組織をつくり、これを『二才咄』(にせばなし)と名付けた。さらに、日常守るべき十条の規約を定め、これを『二才咄格式定目』と名付け、実践させた。

すなわち、新納忠元の日新公から受けた薫陶は、ここに青少年教育の指針を生み出し、これがそののち成立する郷中教育の支柱となった。

五、郷中教育の成立

二才格式定目のもとで二才仲間はそれぞれ集団を組織して研磨に励んだが、『二才咄』への出入りは、比較的自由であり、統制のための規律もなく日常生活における成員の行動は、各自の恣意に任されていた。その状態は江戸時代の元祿5年(1692年)頃まで続

いたと思われる。

しかし、太平に慣れた元禄時代の華美の風潮に風紀は乱れ、元禄15年頃には、怒濤のごとく蔓延した悪風潮は容易に改まる様子もなかった。そのため、二才衆の生活・行動は厳しく規律によって制約されるようになり、第4代藩主吉貴公は、宝永4年（1707年）に、『御袖判条々』という布達を出して、二才衆が交友で遠方に行くことを禁じた。

行動範囲に地域的制限を設けたことによつて、『方限』^{ほうぎん}という概念が生まれた。『方限』は面積でいうと4〜6町四方、戸数でいうと40〜80戸を単位とする行政区画であり、この『方限』は、二才衆の不行跡・喧嘩等を取り締まる目的をもつて起きて来たものといふことができる。

ついに『咄相中掟』の条項に、この『方限』の概念が取り入れられ、宝暦4年（1754

年）に『稚児相中掟』が出される。この年は、薩摩藩が幕府から木曾川治水工事（宝暦の治水工事）の命を受けた翌年のことだった。こうした経緯を経て、第8代藩主・島津重豪公の安永年間に郷中教育が完成した。

（元九州職業能力開発大学校教授）

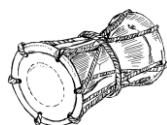
【参考にしたサイト及び図書】

- （1）新納忠元ーウィキペディア
- （2）松本彦三郎著『薩摩精神の真髄 郷中教育の研究』（株）島津興業・尚古集成館、2007年発行
- （3）下土橋渡『郷中教育が培った薩摩の士魂／日本主義』No.22・2013年夏、白陽社



能は私の道標

中西 喜彦



一、はじめに

昭和31年4月鹿児島大学農学部に入學したころ、「人は何のために生きているのか」「人生は如何に生きるべきか」考えていました。その答えを得るため剣道部に入部しました。さらに大学の先生方を訪ねたり教会やお寺を訪問したりしました。専門課程に進んでは学内牧場の技官の方の家に間借りしたり学内牧場の宿舎に泊ったりさせてもらいました。しかし個人的な修行の方法などはある程度理解出来たものの、国や社会の在り方に対するヒントはあまり得られませんでした。

その頃近くに住んでおられた先生から謡

曲の同好会があることを教えてもらい、それに参加しました。能の素謡すウタイといって能のセリフ集を謡うだけのことですが、毎週、農学部の先生が謡われるのに合わせて謡って曲目を増やしていきました。その中で能「花月」を知り、自分の人生の指針になると考えました。

鹿大を卒業後、九州大学院の農学研究科の修士課程に進学したので、福岡の実家にもどりました。その時、鹿児島大学で稽古をつけていただいた権藤道夫先生の紹介で能楽師に師事するようになりました。博士課程3年時に鹿児島大学農学部助手として赴任しました。福岡で師事していた能楽師が鹿児島にも来ておられたので引き続き稽古を続けました。ここで改めて素謡すや仕舞、舞囃子などを本格的に習うようになりました。

二、私の生立ち

筆者は、昭和12年2月に福岡県添田町

（英彦山の麓）で生まれました。4歳の時に母が亡くなり父が再婚したので4人の兄弟が生まれて5人兄弟の長男として育ちました。高校時代までは父に最も影響を受けました。

丁度筆者が昭和20年6月小学3年生のとき、福岡市の大空襲があり、その年8月に終戦を迎えました。空襲を受けた父は家族を3か所に分散させ、私は壱貴山に単身で疎開しました。丁度私の高校時代までは終戦後の治安の乱れた時期で、父は警察の幹部として公私ともに大変な時期であっただろうと思います。そのせいで私は小学校5回、中学校2回、高校2回、水城学園時代迄転校を繰り返しました。戦後の最も混乱した時で、父の一番多忙な時代に学校生活を送ったことになりました。

父は中学1年の私に「自分はいつ死ぬかわからない。君は長男だから死んだときは宜し

く頼む」と話すとともに、「人間は地位や学歴よりも苦勞をしっかりとて物事の本質をよく見極められるようになることが大切である、巡査の時は楽しかったけれど今の署長家業は苦勞が多い」と言っていました。「実際に自分が亡くなった時に泣いてくれるのは家族だけだから」とも話していました。

「人生の目的は、学歴や地位や金儲けではなく、苦勞して実社会の実態を知ることである。最初は丁稚奉公から始めるとよい」という話もしていましたが、高校への進学者数も増えてきたためまずはどこか好きな大学に行くようにということで鹿児島大学農学部へ入学しました。

鹿児島大学で農業関係であれば静かな生活が送れるであろうと農学部を選び、生まれて初めて鹿児島島の地を踏むことになりました。

三、私の仕事内容

昭和39年5月、九州大学農学研究科博士課程3年時に母校の鹿児島大学農学部の中古に助手として採用されました。丁度、母校は戦後の学部内の改組が行われ、農学科、蚕糸学科、総合農学科を解組・再編して新しい畜産学科が前年の昭和38年に設置されたばかりでした。その中で私たちの畜産研究室だけが畜産の専門科で他の研究者たちは前述のような専門性をもって研究対象を畜産の方に向けていく時期でした。畜産学科の主任教授の西山久吉先生は学生時代の恩師でもあり助手としてできることは何でも加勢しました。

例えば、付属施設として種子島にあった牧場を薩摩川内市に移動新設することになっていました。また、動物飼育棟の新設や、研究棟の新設、専門の研究者の招聘など、研究以外の業務が山積していました。特に種子島か

らの牧場移転は、現在の薩摩川内市入来町に150ヘクタールの土地を購入して新たに畜舎や牧舎、研究事務棟建設へと進むのでした。専門家の中で最も若い私が現場の測量、造成の立ち合いなどを第一線に立ってやるようになりました。昭和43年に牧場が完成して開場しましたが土づくり10年、草づくり10年、牛づくり10年と言われるように、非常に多くの苦労がありました。一方、研究としては大学院時代に、西南団地の乳牛の泌乳量を向上させる基礎的研究を行いました。牧場の造成と細かい研究の両立を図りながら何とか完了することが出来ました。

①環境温度と泌乳ひにゅうの関係

自分の研究としては泌乳ひにゅうに対する環境温度の影響を調べることでした。妊娠したマウスは33℃の高温環境下だと子どもを育てることをせず、分娩した子どもをかみ殺して食

べてしまい、自分は元気にしています。しかし32℃では子供を育て始め、減食して発熱を抑え、自分の体成分を乳に回して、子どもを育てます。

離乳期には子どもは元気にそだちますが、親マウスはやせ細ってしまいます。

親ラットは32℃で子どもを育てますが、泌乳最盛期の夜間に死んでいました。しかし、子は元気になっています。その原因を探るために親の体温を測ると夜行性のため真夜中に体温が1℃上昇しそのため熱死することが分かりました。このように、泌乳というのは1℃の差で自分が生き残るか子孫を残すかの微妙な接点があることがわかりました。

一方、7℃の下でマウスを飼育すると採食量は著しく増加し、体重も増加し自分の生んだ子供以外の子どもを加えても十分に育てます。

これらのことは、動物は一定の条件下で必死に子孫を残そうと努力することが分かりました。西南団地での酪農を盛んにするにはいかに夏場の環境を快適にするかということが課題になると思いました。

②低栄養と繁殖の関係

次に低栄養と繁殖の問題について追及しました。

低栄養状態を50日ほど持続したままで死滅したラットの下垂体中の卵胞刺激ホルモン濃度はまだ高濃度を保っています。このことから、栄養条件が戻れば常に繁殖に対応できるものと考えました。低栄養下でラットを40日ほど飼育すると10日から性周期が乱れ始め、1か月ほど経つと完全に性周期が停止します。しかし、その時点の脳下垂体中の卵胞刺激ホルモンの濃度は、ラジオイムノアッセイ法で測定すると正常時の2倍から3倍

に増加しています。逆に飽食に戻すと1週間ほど経つと性周期は完全に回復します。

大学農学部附属入来牧場において、約10年間にわたり、妊娠分娩した放牧黒毛和種の雌牛約100頭について、体重の推移を月ごとに測定しました。その推移をみると妊娠中や授乳中にかかわらず、9月から体重が徐々に減少し、牧草がほとんど無くなる3月を底辺にして4月から増加していることが分かりました。乾燥や最冷時などは飼料を相当量補給してもこれらの大きな傾向は改善できませんでした。牛は一日に体重の10%の草を必要するといわれています。ところが、高地の草の生産量は9月から殆ど生産できません。そこで、夏場に干し草やサイレージを製造し冬場に備えます。しかし、西南団地は雨量も多くなかなか良好な冬用の飼料を用意することができません。

一方ラットでの実験では低栄養状態でも正常な栄養状態になると繁殖能力がすぐ回復することが分かりました。そこでできるだけ牧草地の平らなところを畑地化して9月に寒地型の牧草を散布して栽培して飼料が不足する12月から3月まで妊娠牛や授乳牛をその中に遊牧しました。これによって平地の舎飼い牛並みの繁殖能力が維持できることがわかりました。

③牛を用いたバイテク研究

凍結融解を20回繰り返して、完全に死滅した精子を一匹顕微鏡下で取り出し、体外培養した卵子に顕微授精します。さらに胚盤胞まで発育させ、授精適期の雌牛に移植し、生まれた子牛を生育させ、さらに妊娠させて健全な子牛を得ました。

その基礎技術として当時、体外での卵子の培養は2細胞ブロックといってそれ以上は体

外では発育しませんでした。私どもは、食肉加工センターで卵巣を採取し、その中から卵丘細胞を取り出します。その上で受精卵を培養すると容易に移植可能な胎盤胞に発育しました。それを入来牧場の雌牛に移植して子牛が得られました。

昭和63年、私は米国のウイスコンシン州立大学に5か月留学しましたが、生きた牛の卵管を採取し体外で卵丘細胞を培養し、同様の結果を得ていました。丁度時期は同じでしたがその経済的な有利さは我々の方法がはるかに優れていると思いました。

④ミニブタを用いたバイテク研究

医学部動物実験施設専任教授の山内忠平先生から相談を受け、昭和53年に同腹のオス1頭、雌2頭の雑ミニ豚を研究室に導入しました。これを豚の繁殖や特に精子の研究に用いることにしました。10年ほど継続して

飼育すると毛色が白で家畜豚では6か月令で120キロになるものが、ミニブタでは25キロになります。丁度医学系で用いる実験動物としてミニブタが注目されはじめた時期でした。

県との共同研究では、試験場で頭数を増やして多頭飼育いろいろな適性を調べました。この集団は免疫に関係が深いMHC（主要組織適合性遺伝子）が一組しかない集団のため臓器移植の研究に適していることがわかりました。そこで畜産会社ジャパンファームに譲渡しクラウン研究所として、遺伝子型のはっきりした実験動物として供給することができるようになりました。鹿児島大学でも生物資源開発研究センター（異種移植分野）として研究が開始されました。

退職後、このことから（株）ジャパンファームクラウン研究所の技術顧問として3年間

勤めました。その後2年半前述の異種移植分野の特任教授として勤務しました。

四、能の魅力

お能の演目は約250曲あり、曲目ごとに主人公（シテ）の生き方が示されています。お能には5つの曲柄があります。神物「神」、修羅者「男」、鬘物「女」、雑物「狂」、鬼物「きり鬼」があります。それらの中には、万葉集、古今和歌集、源氏物語、太平記、平家物語などの文学作品や、地方の風土記などを題材にして神道や仏教の考えをもとに人物が描かれています。

63歳の時に先生にお願いして「花月」を福岡の大濠能楽堂で披露することが出来ました。さらに70歳の時に指導して頂いた宝生流能楽師石黒孝先生の能「花月」を鑑賞しその足で、自分の生誕地であり、物語の主人公が天狗にさらわれたという英彦山の麓に夫婦で行

き、花月が天狗にさらわれたという記念の場所や山伏たちの修行をしたという場所を確認しました。

この中では人間生活の行動がほぼ網羅されており、神道や仏教の考えをもとに人間世界の道德観を満たしているように思います。中でも現在筆者は、「花月」「高砂」「邯鄲」「三輪」の4曲に強く惹かれています。また、盲目の人物を主人公にした「弱法師」や「景清」にも親近感を抱いています。

しかし、もう少し能の詳細を知りたくて65歳の大学定年退職後2年間上京し宝生流教授嘱託会東京支部に参加し、研鑽に努めました。

68歳の時に前年に新設された鹿児島県民交流センターの能舞台で、能「高砂」を演じその新設を祝いました。人生を祝福する能「高砂」や人生を終った時の能「邯鄲」を知



仕舞「三輪」 中西喜彦、第70回鹿児島謡曲連合会大会
(令和5年10月22日、於：かごしま県民交流センター)

ると、改めてお能は示唆に大変富んだものであると感じました。

最後に第70回鹿児島謡曲連合会大会では、能「三輪」の中の天岩戸物語を仕舞で演じました。筆者は、自分の人生をお能の中に反映させて演じることにより、何らかの安らぎを得られるように思った次第です。

私の感じる能の魅力は、一曲の中のシテ役の人生が一人によって演じられることにあります。

能は人の生き方には共同的な社会としての規範としては、わが国では神道、ヨーロッパではユダヤ教やイスラム教などが考えられています。個人的な規範としては、わが国では仏教、西洋ではユダヤ教やキリスト教が考えられるのではないだろうか。筆者は能の中に、いろいろな人の人生を見ることができて、非常に自分の行く末を反映させること

が出来るように思いました。しかも能は、単なる劇として観るだけでなく自分でせりふを覚えたりエッセンスを加えたり、物語の中心の課題を舞で表したりして、一つの長い人生を一つのコマの中に要約できるように思いました。この能が室町時代に確立されて、現代まで約650年に渡って、ほぼ同じ形で継続されていることに非常に不思議な感覚を持っております。

五、「花月」のあらすじ

「花月」という名前の少年が英彦山で7歳の時にさらわれて国内の修験道の聖地を天狗に連れまわされて最後に清水寺でお寺の由来を紹介し、鞆鼓舞を演じて生活しています。そこで我が子を探し求めた父親と再会し、二人で仏道の修行に旅立って行きます。ここに原文の要点を紹介します。

「これは花月という者なり。ある人我が名

を何とて花月というぞと問えば我ことふ。月は常住にして言うに及ばず。さて花の字はと問えば。春は花、夏は瓜。秋は果（このみ）冬は火。因果の果をば末期まで。「この花月の意味するところは太陽と月を表しています。すなわち太陽は、4つの季節を作り、因果の結果をも示しています。月はいつも現れるという意味です。

私の人生も要約するとこのようなもので「とられてゆきし山々をおもいやることこそ悲しけれ。」という所感に要約されると思います。

前述のように、能「花月」は人生の道標として活用しました。今度は、能「三輪」を日本国の一つの道標として推薦したいと思えます。

六、能「三輪」から、今後のわが国を考える。

私の生き方については前述のように、能「花月」について述べました。

次に、日本の行く末について能「三輪」で考えることが出来ます。まず、天岩戸物語を題材にしていますが、天照大神が、須佐能命の乱暴狼藉に堪えかねて天岩戸の中にお隠れになります。世の中が真っ暗になります。困った神々が岩戸の前に集まって神楽を奏して賑わいます。何かと天照大神が岩戸を内から開けられるとまた日が輝いて、みんなの面（顔）が白くみえたというところで「面白し」と言われたという神話の初めの物語と紹介されています。そして「伊勢と三輪とは分身一体のおんこと。いまさら何と岩倉や、その関の戸の日も明けてかくありがたき夢の告げ、覚めるやなごりなるらん。」でお能は終わります。

4年前の自民党総裁選挙の際に岸田現首

相と河野太郎氏と高市早苗氏が立候補されました。高市早苗氏は、故安倍元首相の推薦で100人以上の推薦者を獲得し実質上は一番多い数の推薦人を獲得されました。その時どのような経歴の人かと調べてみました。奈良県桜井市の畝美高校の出身と知って、能「三輪」を思い出しました。今年の9月の総裁選挙では故安倍元首相がご存命でないのどのようなものかと思っています。故安倍元首相の応援がなければなかなかむづかしいとおっしゃいます。しかし、最近の自民党の状況を見ると高市早苗氏に非常に有利な状況が起きています。目下、国内だけでなく米国においても「もしトラ」が「ほぼトラ」に変わり、ともにトランプ氏と対等にわが国の立場を主張できる第一人者は、高市早苗氏になると思います。

高市早苗氏は、皇統の維持と憲法の改正を

主張しておられます。わたしの考えでは、まず、自衛隊を戦える正常な軍隊にして、アメリカの79年に及ぶ米軍のわが国での占領を中止して欲しいものです。

神話で示された暗闇は日食ともいわれています。が実際は富士山の噴火によって長い間暗闇が続き農作物が出来なくなつて皆が集まつて相談したことを暗示しているともいわれています。

現在の世界情勢は、ヨーロッパにおける宗教戦争あるいは植民地支配その後は共產主義あるいはグローバリズムなどの考えの下で戦争が絶えません。第2次大戦後も各地での戦争が頻発しています。わが国もいよいよ紛争に巻き込まれる瀬戸際にあります。いわゆるこれらの暗雲に強い光を当てその原因を知る必要があります。すなわち「面白く見える」の諺を現代にあてはめたいものです。

七、能「鵄」で、対米関係を考える。

最後に能「鵄」で今後の世界情勢の行く先を考えて見たい。鵄の正体を紹介すると頭は猿、体は狸、尾は蛇、脚は虎に、それぞれ似ていたという怪物です。御所の屋根上に毎夜飛来し不気味な声で鳴き皆を悩ませます。天皇は源頼政に弓で打ち取るように命じます。そこで源頼政は弓で撃ち落とします。亡骸をウツボ舟に乗せて淀川に流します。

歴史上の秦河勝は赤穂に流されて、地方に貢献し神として祭られています。

世阿弥は秦河勝のことを自分の先祖と言っています。その秦河勝のことを偉大な先祖として書くのではなく、得体の知れない鵄にたとえて淀川に流してしまうという物語を作っています。秦河勝は聖徳太子の財務大臣ともいわれ、京都御所の造営をはじめ多面的な活躍をした人物です。秦河勝はユダヤ系の渡

来人と言われています。

能「鵺」の面白さは物語の筋だけでなくシテ役が天皇の役と源頼政の役と鵺の役を連続的に一人で演じるところです。特に鵺が矢に当たって仰向けにそりかえり、そのままウツボ舟に乗せられて淀川に流されていく様を演じるところです。どう演じるかは各流派の見せどころです。

現在は、各地で戦争が多発し混沌たる状態にあります。米国はそのすべてに関与しており、国際金融連合及び deep state と言われるユダヤ系の人々によって権力構造が占められています。まさに鵺のように得体のしれない存在です。現代の鵺は民主主義・自由主義・平等主義、さらに株・為替・ネットバンキングなどと鳴いています。

現実の米国社会は 建国時代の理念を失いまさに金権社会になっています。建国当初

はアングロサクソン系の実利主義とキリスト教の博愛精神を掲げていました。今は人種構成も大きく変化し、まさに国の方針を明確にできない状態になっています。

自分だけ、金だけ、今だけの社会になっているように思います。

わが国がこの鵺に対応するには、弓矢として実体経済をもって対応する必要があると思います。例えばトヨタをはじめとする企業は各国の実態に即した製品を提供し、あるいは大谷翔平のように金銭を目的にするのではなく実態の向上を追求することだと思っています。

いわゆる「道心に食あり、食に道心なし」ともいわれるように日本が永年培ってきた道徳心を追求しながら生活していけば、自然に道は開けてくると思われます。

（鹿児島謡曲連合会前会長、鹿児島大学名誉教授、炉ばたセイ談会会長）

〔第20号発行記念掲載〕

渋谷氏五族の消長

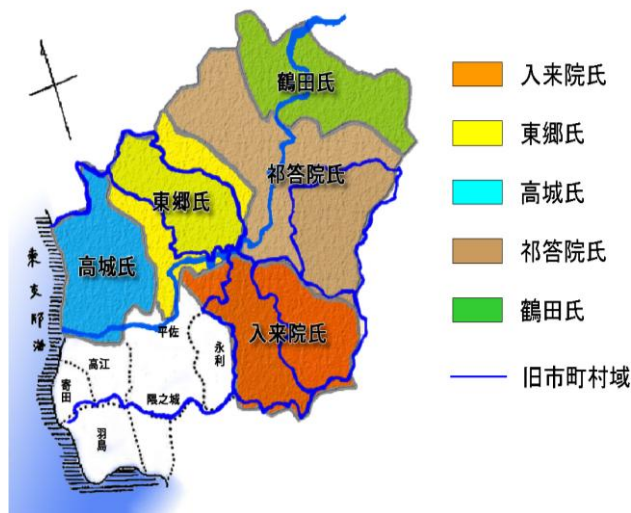
入来院 貞子

渋谷氏の下向

一二二一年、源氏三代で断絶後、後鳥羽上皇が倒幕の挙兵をしたが、敗北して隠岐に流された。承久の変である。渋谷氏は幕府方として功績があり、一二四七年の三浦・千葉氏の討伐にも手柄があったので、千葉氏の所領だった東郷・祁答院・鶴田・入来院・高城の諸郷を与えられた。

当時は代官を派遣して知行させるのが一般的だったが、千葉氏の代官が悪政で領民を苦しめた愚を繰返さずに、領主権を確立させる必要があったこと、北条氏が自分の地位を

確立するために、有力な功臣を次々に除いていたことに、危機感をもって自家の存続を図ったことの二つの理由で、次男以下を薩摩に下向することにしたようである。(川崎大十著『渋谷党の足跡』による)



渋谷氏五族に与えられた川内川下流域

一二四八年春、兄弟はそれぞれ与えられた領地に到達する。しかし平穩に領地を手に入れた訳ではなかった。

渋谷氏下向以前の川内川流域

平安時代は中央から任命された国司・郡司によって治められていたが、平安末期には律令制が衰退し、自衛が必要となつて各地に武士が台頭して実質的領主として支配していた。この地方の主だった支配者

- ① 伴姓武光氏
- ② 大前氏
- ③ 大蔵氏
- ④ 宮里氏

鎌倉初期に幕府は薩摩・大隈・日向の守護として島津氏を任命し、川内地方には千葉常胤を地頭に任命した。当時は任命されても実際は代官が差配していた。千葉氏の代官が非道狼藉を働き、その取締りを命じた文が残つ

ている。

前述の土着の領主も次第に統合されて行くが、渋谷氏が下向した当時の川内川下流域は、こうした混乱のさ中であつた。

東郷氏

東郷氏は五兄弟の一番年長の実重に始まる。所領は、薩摩川内市東郷町全部・田海・白浜・中郷町、それに現さつま町の二渡・白男川・泊野であつた。

下向したものの、中心は大前氏が押さえていて、車内村（田海町）の館に居を構えた。本城の鶴岡城を手に入れたのは六代氏親の頃だったらしい。鶴岡城は、地形を巧みに利用した薩摩川内市・さつま町の古城の中でも最も複雑な築城構造であるが、三巨城といわれた他の清色・虎居の二城に比べて一般に知られていない。

五代重親は大前氏を降すことが出来ない

ことを残念に思つて、弟に家督を譲り「自分は地下の鬼となつて敵を滅ぼすのだ」と言つて甲冑を着け葦毛の馬を鞭打つて淵脇山の土穴に駆け入つて自刃した。重親の墓の横には昭和十年八月に建てられた「東郷重親公仰靈之碑」という石碑がある。重親は、権現山の



鶴岡城跡
(薩摩川内市東郷町斧淵三ヶ郷)



東郷重親公の墓
(薩摩川内市東郷町斧淵小路)

紫尾神社に合祀されている。
伝説によれば、重親は「自分が死んだら必ず霊験を表すからそこに祀ってくれ」と遺言を残していた。その後権現山のハゼの木に夜な夜な神灯が現れたので親大明神としてここに祀った。その後その木は枯死し、植えなおしたものが現存する。

以来、東郷氏は葦毛の馬は使わず、箸にハゼの木を使用しなかったということである。

十三代重信に至り、本領の他に高城・水引一円も領有、十六代重尚は高城・水引・湯田・西片など二万石あったという。

その後島津氏との抗争で残るは入来院と東郷のみとなった。永禄十二年、重尚は入来院重嗣と計って、所領の東郷・高城・中郷・湯田・西片・京泊の地を献上して貴久に下った。

貴久はこれを許し翌年東郷の地を重尚に与えた。一五八七年、島津義久によって没収され、東郷氏は断絶した。

その支族は多く、また姓も変えた支流もあって、現在各地に存続している。

祁答院氏

次兄重保は現さつま町の二渡・白男川・泊野・鶴田を除いた土地を与えられた。しかし

兄東郷氏と同じく大前氏が勢力を奮っていたので、さつま町柏原に居住し、長岡城を手に入れた。所領を確保し虎居城に居住していた記録は七代重茂にある。

虎居城はU字に屈曲して囲んでいる東西4百メートル、南北1キロの広大な山城で、



川内川の対岸（北西）から見る虎居城跡
（薩摩郡さつま町宮之城屋地）

中におきたの城・塩の城・中の城・松社の城
(本丸)・城内と続いている。

最北端の城内の下が八女瀬で、九代徳重の娘が川に落ち侍女七人も水死した所である。ちなみに彼女らの死体の上がったところが、樋脇川との合流点で、その地の戸田観音は彼女たちの慰霊のためと言われている。

菩提寺の大願寺には二十四基の石塔があり、昭和六十二年「大願寺跡墓石群」として県の文化財に指定された。

十二代重武は南部の始良方面に進出し、帖佐本城・新城・山田城を併領した。十三代良重になって、勢いは益々盛んになったが、島津貴久との帖佐岩剣城の合戦(一五五四年)に破れ、翌年始良から撤退した。島津氏はこの戦いで初めて鉄砲を使用したということである。

永禄八年(一五六五)良重は紫尾山で猪狩



大願寺跡墓石群
(薩摩郡さつま町柏原)

りをして越年し、戻つての正月の宴で泥酔していた所を薩州島津実久の娘で政略結婚していた夫人に懷刀で刺殺される。控えていた入来からの小姓、村尾亀三が屏風の上から夫人を刺殺した。ここに、祁答院家は十三代・三百十九年をもって断絶する。

支流は入来院の家臣となった家、黒木・大口に移住した家や苗字を変えた家など多く現存している。

虎居城はその後暫くの間、入来院氏に委ねられていたが、鶴田・柏原・中津川・久富木を含む十二村を与えられた島津義久の弟、歳久（金吾さあ）の居城となった。歳久が秀吉に咎められ切腹した後、貴久の弟の子忠長に与えられた。宗功寺の墓地はその家系のものである。

鶴田氏

鶴田氏初代の重諸は、実際は承久の変で戦死していたので、実際の下向は二代重行であった。多分五氏の中で最年少であったことから、比較的安定していた天領を領有することになったのだろう。

初めは鶴田郷全域ではなく、宮之城郷佐志・湯田・求名・曾木郷長野の四ヶ村を含む



鶴田城跡
(薩摩郡さつま町鶴田字古城)

地域のようなものである。

居城は、初めは宮之城郷佐志の大谷（うたい）に居住したが、その跡はない。重行はその後間もなく鶴田城を築いた。鶴田城は字古城と字求名にまたがる山地で、東西四五〇メ



鶴田氏の菩提寺・長福寺跡
(薩摩郡さつま町求名)

ートル、南北二〇〇メートルの規模を持つ。
鶴田氏の菩提寺は求名の下手公民館付近で、俗に寺屋敷と呼ばれている。国道二六七号の改修工事により石塔群十数基は下手公民館の庭に移された。旧薩摩町の文化財に指定されている。

渋谷氏の相模の鎮守五社神社を東郷氏と鶴田氏が奉祀している。鶴田では後年諏訪防

にある南方神社に合祀された。ご神体は木坐像で、五体が安置されている。

渋谷五族は下向以来渋谷党として、お互いに結束し、協力し合ってきたが、四代重成のとき島津氏が奥州家と総州家に分かれて抗争していたのに巻き込まれて分裂した。

鶴田氏が奥州家に着いたのに、他の四族は川内の総州家に付いた。奥州家は、大隈が本拠で、東側にあつた鶴田氏に影響力が強かったと思われる。



一三九五年、渋谷四族は鶴田城を襲った。氏久は鶴田重成を援け大合戦に及んだが、氏久に利あらず、入来山を越えて退いた。急迫

する渋谷勢に、氏久は兵を返して逆襲し、これを退け無事退却することが出来た。この戦を『山引合戦』という。（入来 of the 山を越えて兵を退却させたの意）



鶴田合戦古戦場跡
(薩摩郡さつま町鶴田)

一四〇二年、再び総州伊久と渋谷の攻撃を受けて、敗北。鶴田氏は断絶した。

歌誌「にしき江」主幹鶴田正義氏はその嫡流である。

高城氏

高城氏の初代重貞も実際は承久の変の折、戦死している。二代重秀の所領は川内川以北の高城郷・水引郷および阿久根（大川）の一部である。その三分の二に当る一六〇町が千葉氏の遺領であった。居城の妹背城は旧川内の城内にあり、武光氏が居城としていた。別称高城城、高城本城とも呼んだ。高城小学校の東北に位置する小丘で、東西二〇〇メートル、南北五〇〇メートルの平山城で、西側には三〇〇メートルの濠の跡が残っている。

重秀は高城郡北部の大河に居を構えた。武光氏を排除するのに時間がかかったと思われる。

他に水引城がある。御陵下町の本城を中心とした位置にあった。別称を屏風城・田島城と呼んだ。記録によると、一四〇一年総州島津守久から、当城と椿城（川内五代町）を

譲られたとある。

高城氏も三代重郷の弟が公安の役に出陣し、壱岐の島で戦死している。

その後高城氏内で内紛が生じ、兄弟が島津の総州家・奥州家に分かれて戦い、兄は追われて水引城に移り、弟が妹背城を奪ったが、間もなく島津立久に攻略され落城している。

一四八五年、薩州島津が南下し湯田城・水



妹背城跡
(薩摩川内市高城)

引城を攻略したので、城主重頼は城を棄て祁答院氏を頼って祁答院に奔った。高城氏の嫡流は水引の地も失った。

渋谷氏の総領東郷氏は、同族の高城氏没落の後、渋谷の地の回復を図った。本格的に妹背城を攻略、高城を併合した十四代重明は叔父重隆に高城を領有させた。重隆は高城氏を名乗り、妹背城を居城とした。



高城氏石塔群
(薩摩川内市高城)

東郷高城二代の重誠は優秀な人物として、『稚児ヶ淵伝説』がある。弟重貞は入来院重聡の養子になったが、重朝の誕生によって庶流の長男として所領一五町を与えられ松尾城を居城とした。しかし薩州島津と百次で戦い討死した。その後、東郷宗家に追われた兄の重誠も母方の入来院を頼って入来院の家臣となった。

菩提寺は前領主に続いて信興寺で、明治二年廃寺になり埋没していた石塔を後年高城小学校の裏手に集めたという東郷高城氏の石塔群があり、平成元年市の文化財に指定された。なお背後の裏山には墓石が散乱していて、渋谷高城氏のものが見つかるかもしれない。

入来院氏

下向した渋谷氏兄弟四番目の定心の領地は、薩摩川内市の入来町・樋脇町と旧川内市の久住・中村・楠元町であった。

この地は千葉氏の遺領であったが、大蔵種明の勢力下だったので、最初は樋脇町内の倉野に入り、次いで元村に館を構えたという。元村には定心が勧請願した妙見神社、諏訪神社がある。

清色城には四代重基か五代重勝のころと思われる。



清色城跡
(薩摩川内市入来町浦之名)

三代公重は、国難元寇の時代であった。第二回の来襲弘安の役には、弟の有重を軍代として、その弟致重・重尚とともに従軍させたが、三人とも戦死した。向山の重来神社に關ヶ原の戦いに戦死した十五代重時とともに合祀されている。

四代重基の時から南北朝の戦乱時代に入り、九州も入り乱れての合戦の日々となった。一三七二年、六代重門は高江郷峰城を攻め、城は陥落させたが、重門は城壁を登る時堀に落ち、敵の落す大石に兜を割られ戦死してしまった。その四百九十余年後地中から重門の碑が発見され、峰城内松嶺寺に建て直したが、その寺地に峰山小学校を建てるため整地をしたとき無くなってしまったという。

その後二百年ほどは、時折は和睦しながらも島津氏との抗争が続き、『山北の四賊』と呼ばれた。

七代入来院重頼のとき、島津元久に負けて清色城を明け渡したことがあったが、後に入った伊集院頼久に領民が全く懐かず、仕方なく入来院に返還したという。入来院氏が領民の信望を得ていたことを物語っている。

十一代重聡の時代は島津一族も乱れていて、伊作の島津忠良（日新公）は加世田と出水を領有していた薩州島津家の実久に勢力を阻まれていた。忠良は息子貴久の嫁に重聡の



戦国時代の島津本家と分家

娘を迎えた。そして連合して薩州島津に当つた。やがて忠良は加世田を攻略し、薩州家の出水の勢力も食い止めることが出来た。

十二代重朝の時代は入来院の最盛期で、川内の大部分と郡山、始良の辺りまでを勢力下に収めた。しかし強大になった入来院氏は疎まれ、忠良・貴久に攻められる立場になってしまった

貴久の三州統一は着々と進み、渋谷氏は力を失った。十四代重嗣の時代に、東郷重尚と今後の見通しを相談し、百次・平佐・碓山・高江・隈之城・宮里・京泊・清色の全領土を差し出して降伏することにした。貴久はこれを許し、清色を重嗣に与えた。その後も重豊の代に山田・天辰・田崎を失った。武士の数は変わらないのに領地は減ったので維新まで半農半士のつましい一族となった。

ともあれ入来院氏は、渋谷氏の中で縮小さ

れたとはいえ、唯一継続して同じ領地を護つて来た。それは全国でも入来院氏と人吉の相良氏のみという。

清色城

この山城は、東西一キロ南北七五〇メートル周囲二・八キロである。東・南・北の三方を周流する清色川を濠とし、七、八〇メートルの断崖は天然の城壁を形成している。城中



清色城本丸跡

に本丸・松尾城、中之城・西之城・求聞持城・物見之段などを始め広い段丘が多い。

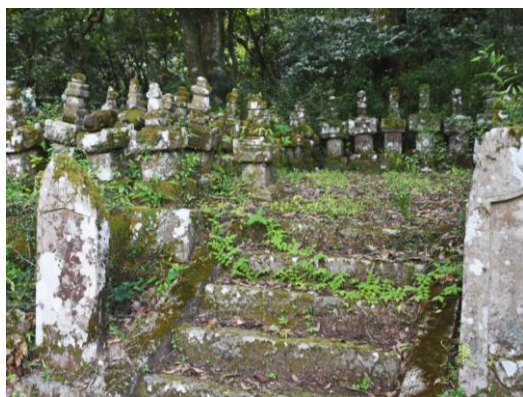
平成十六年国指定の山城となった。現存する武家屋敷群を身近に持つ山城は他にはないと言われている。

いくさ墓

戦乱の世、出陣するとき死を覚悟して生前に自分の墓を作ることがあった。これを逆修墓という。

文明（1469）から天正（1563）までの百余年間のもので、領主では重門・重茂・重豊・以下重嗣まである。

十一代重聡の時代、薩州島津実久は南下し、高城・水引・百次・山田以西を占領した。重聡はそれを奪回するため、重朝の生まれる前に養子としていた東郷重貞とともに、川内地方で激しい合戦を何回も行なった。この戦のために作られたものが多い。



いくさ墓

一五二八年村尾平次郎、翌年岡本八郎、そのまた翌年山口重昌、翌一五三一年四月には入来院重直といずれも身内の重臣を百次の上野城を攻めて戦死させている。同年六月総大将として出陣した東郷重貞は、兄重誠が付けてくれた東郷の重臣武元右京とともに百次溝口で戦死した。右京が白髪を振り乱して奮戦

したことが永利史誌に記録されているという。二人の戻らない悲しい逆修墓がいくさ墓にある。その後、十二代重朝が百次上野城を奪回した。

旦那墓

入来町元村に鎮座する妙見神社の近くに定永寺があった。この寺跡の奥にある墓で、右が七代重頼、左が十四代重豊の墓塔である。重頼は山引合戦の後島津元久を悩ませ、一旦は失った清色を武力でなく領民の支持によって回復させた。

重豊は、島津の家臣として浅い入来院家が存続出来るかの難題を血判状の提出でなんとか防ぎ、定着、安定させた外交の手腕の持ち主といわれている。義久の家臣となって、日向、水俣の合戦にも加わった。義久の従弟の島津以久の子重時を養子とした。墓塔は2メートルあまりで町内最大といわれている。



旦那墓

お石塔

明治の廃仏毀釈で跡形もなく消えた町内最大の名利寿昌寺の境内にある入来院家代々の墓石群を指す。

間口五間（9メートル）奥行き一〇間（18メートル）の石畳の上にぎっしり豪華な墓が建っている。

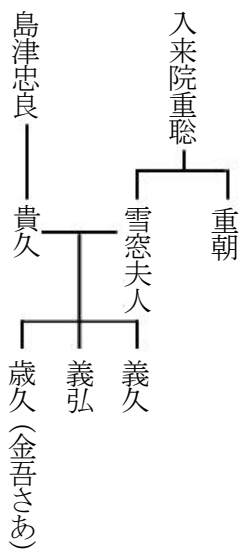


お石塔

一六六六年に歴代の寄せ墓を作ったのがこれである。石塔数四三基、うち十九基が石祠型豪華塔である。石に彫られた家紋を見ると島津家から嫁いできた妻の墓の方が夫よりも大きいものなどあるのが興味深い。

島津家と入来院家

重聡は薩州島津の南下を防ぎ、重朝は平佐・百次を奪回して、妹の婚家伊作島津家を大いに悦ばせた。そして「川内地方を好きなように奪え」と言ったが、入来院が強大になることは望まず、重朝を攻めることになった。島津家を中興させた義久・義弘、秀吉に逆らって切腹した歳久の三人の母は重朝の妹窓雪夫人で、重朝を排除することにした年の夏に死んだ。



重朝の子重嗣の時、島津氏に降伏する。その子重豊の妻は、貴久の弟忠将の娘だったが

男子がなく、妻の甥の重時が養子に入る。その重時は関ヶ原で戦死する。男子がなかったので、断絶させられた薩州島津忠辰の弟、重高があとを継ぐ。こうして、入来院宗家は島津氏と深く結びついて行く。この時代、存続して行くためにはそうした結びつきが必要だったと思われる。

義久の母追悼の歌

入来院史の入来院十四代重豊の項に旧紀雑録からの次の記述がある。

雪窓妙安大姉は、入来院重朝の妹にして島津貴久の夫人なり。今歳天正四年丙子八月十三回忌に当たり、その子義久追悼の和歌を詠して曰く

雪窓妙安大姉三十三回ことし八月十五日に相あたり侍りしは年季も是を限りなれば一人かなしき身にしみとをり時しもあれや秋や



『秀吉・義久和睦の像』（薩摩川内市、泰平寺公園）

は人のわかるべきと云ひおきしいにしえも思ひやられていとも露けき秋を追善に広済和尚詩をつくり手向給ひし其韻字を取りて試みに一首つらね侍るものなり

月にちるはその秋はほともなく

雪に向はんまとの山風 義久

雪窓夫人が亡くなったとき、義久十一歳、義弘九歳、歳久七歳であった。

義久が秀吉に降伏する前夜、伊集院にあった母の菩提寺、雪窓院で得度し、龍白と号したのだった。死を覚悟した義久の臉に去来したのはきつと母の面影だったであろう。

義弘にしても妙円寺など伊集院に戻ったことは、母への思いがあつたと考えられよう。

(庶流入来院家二十一代当主・入来院重朝夫人、平成二十三年五月二日逝去)



庶流入来院家・茅葺門（重要伝統的建造物群保存地区内）

補遺・第20号発行記念掲載について

炉ばたセイ談編集担当 下土橋 渡

入来院貞子さんは、平成十九年九月に『渋谷氏五族の消長』と題する冊子を作っておられた。消長とは、物事が衰えて消えるか伸びて盛んになるか、というなりゆきのことをいう。その冊子を、「炉ばたセイ談」第20号発行記念として、転載する形でここに掲載させて頂いた。それは、渋谷氏五族の下向後のなりゆき、つまり渋谷氏五族が下向した川内川下流域の歴史のなりゆきを知る上で、有用なというより、不可欠な興味ある資料だと思われるからである。

当時は地頭に任命されても代官を派遣して知行させるのが一般的だったが、渋谷光重は五兄弟を実際に薩摩へ下向させた。しかし、五兄弟が平穩に領地を手に入れた訳ではな

った。各地に土着の武士が台頭して実質的な支配を行っていた混乱のさ中の時代であった。たとえば、東郷氏の所領はその中心を大前氏が押さえていて、東郷氏が本城の鶴岡城を手に入れたのは六代氏親の頃だったそうだ。

下向以来渋谷党として、お互いに結束し、協力し合ってきた五族であったが、下向から約一六〇年後の頃、鶴田氏が五族より分裂し、四族との抗争の末断絶した。その後も島津氏との抗争の中で、高城氏、祁答院氏、東郷氏と断絶していった。

そんな中で入来院氏だけは、島津氏の軍門に下り、領地を減らしながらも、明治維新までの六二〇年余りに渡ってその社稷を全うした。

そのような渋谷氏五族の消長を知る上での貴重な資料として参考にして頂いたら幸いである。

「炉ばたセイ談」の生い立ち

炉ばたセイ談会・初代会長 桐野 三郎

「炉ばたセイ談」は「炉ばたセイ談会」（入来武家屋敷茅葺門邸）が一年に一回（九月）発行する機関誌です。

「炉ばたセイ談会」は作家・歴史家であった故入来院貞子氏（一九三二—二〇〇一）が所属する鹿児島ペンシルクラブで平成十三年に提唱、同クラブ代表の相星雅子氏ほか数名の会員がこれに賛同、他に新聞・テレビ関係者、高校・大学の教職員ほか地元の元町長などが加わっていただき、入来武家屋敷の囲炉裏辺で「セイ談」を語り合う会としてスタートしました。

「セイ談」のセイは聖、清、正から醒、政、性まで、つまり話題は問わずお互いの夢を啓くという程度の、堅苦しくない会という意味です。

会は当初武家屋敷の一軒をお借りしてスタートしましたが、行政側の制度変更により借家制度が廃止された後、本拠を茅葺門邸、即ち入来院重朝、貞子ご夫妻宅に移して今日に至っております。機関誌「炉ばたセイ談」は入来院貞子氏が編集長となり平成十七年に創刊、第八号まで手掛けていただきましたが、貞子氏が同二十三年に急逝された後を承けて中西喜彦氏（鹿児島大学農学部名誉教授）が第七号以後を担当、今日に至っております。

本誌の内容は創刊号編集後記にありますように硬軟、左右なんでもありますが、執筆者には一言言を持つ会員もいだけに、入来武家屋敷群の一角から発信されるこの小冊子が、いさかなりとも文化的な刺戟となり得ればと念じております。

「炉ばたセイ談」生みの親といってもいい故入来院貞子氏の願いも、祖霊の瞑るこの入来の地でささやかながら、一隅を照らす灯を点したかったのではないのでしょうか。

（「炉ばたセイ談第九号」より転載。桐野三郎氏は平成二九年二月に永眠されました。）

※バックナンバーは、鹿児島県立図書館の郷土資料コーナーで読むことが出来ます。

編集後記・・・

■本年令和6年は「炬ばたセイ談」第20号発行の節目の年なのですが、父はお構いなしに、いつものように7月初めに巻頭を書いてしまいました。そんなマイペースな父と亡き母のお仲間が19年前に集い創刊した「炬ばたセイ談」も時代が流れて長女の私が名ばかりながら編集に携わっている次第でございます。未熟者で申し訳ない気持ちでいっぱいなのですが、私のお願いでお忙しい中、投稿してくださった十五代沈壽官さんはじめ、多くの皆様にご場を借りて心からお礼を申し上げます。今後もどうぞよろしくお願いいたします。（入来院久子）

■故入来院貞子さんによって平成17年秋に第1号が発行されてから19年、貞子さんの急逝にともない現在の中西喜彦会長とともに編集を引き継いでから13年が経ち、本号が第20号という節目の号になりました。貞子さんをはじめ、「鹿児島ペンシルクラブ」の代表だった相星雅子氏、鹿児島のエッセイストの第一人者だった桐野二郎氏（初代会長）、「随筆がこしま」の代表だった上蘭登幸志子氏ら、創

刊当時の執筆者の方々の「入来の地でささやかながら、一隅を照らす灯を点し、入来武家屋敷群の一角から発信されるこの小冊子が、いささかなりとも文化的な刺戟となり得れば」という思いを、その後執筆に加わって下さった方々と引き継いで参り、巡り着いた第20号であります。特別な記念号とすることはできませんでしたが、中西会長の薦めもあって貞子さんが執筆されていた「渋谷氏五族の消長」と題する冊子を転載する形で、第20号発行記念として掲載しました。渋谷氏五族の消長を知る参考にして頂ければ幸いです。（下土橋渡）

「炬ばたセイ談」 第20号

炬ばたセイ談会会長 中西喜彦

編集担当 下土橋渡・入来院久子

事務局T895-11402

薩摩川内市入来町浦之名130

入来院重朝方

TEL・FAX 0996-44-3586

印刷 新大同印刷株 (0996-30-1811)



令和6年秋
第20号

〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名 130

炉ばたセイ談事務局